

令和2年度
魅力と活力ある学校づくり推進事業
成果報告書

新潟県教育庁高等学校教育課

はじめに

新潟県教育委員会では、「一人一人を伸ばす教育～一人一人の個性に応じた、質の高い豊かな教育の推進～」を基本理念とし、「ふるさとへの愛と誇りを胸に、夢や希望を持って粘り強く挑戦し、未来を切り拓いていける、たくましいひとづくり」を目指しています。

県立高校等においては、平成28年3月に策定した「県立高校の将来構想」に基づき、夢の実現に向けてチャレンジする若者を育成することができる、魅力と活力ある学校づくりを推進するため、平成30年度から県立高校13校において「明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業」を実施してきました。令和2年度から「魅力と活力ある学校づくり推進事業」として引き継ぎ、当初の指定校における事業実施としては、今年度が最終年度となります。

主な事業内容は次の3点です。

- 1 教育環境の充実に向けた教育システムの研究や、地域連携をとおして社会に開かれた教育課程の研究を推進する。
- 2 市町村や地元企業からの協働の提案等を踏まえた取組を推進する。
- 3 「県立高校の将来構想」に示した5つのそれぞれのタイプについて、これからの高校に求められる役割や自校の目指す姿を実現するための取組を推進する。

各校の取組内容及び成果をまとめた本書を有効に活用し、県内の各学校において魅力と活力ある学校づくりが一層推進されることを期待しています。

令和3年3月

新潟県教育庁高等学校教育課長 長谷川 雅一

目 次

1	新潟向陽高等学校	1
2	巻総合高等学校	6
3	新津高等学校	12
4	村松高等学校	18
5	村上高等学校	22
6	阿賀野高等学校	28
7	正徳館高等学校	33
8	栃尾高等学校	39
9	吉田高等学校	45
10	塩沢商工高等学校	51
11	十日町高等学校	57
12	久比岐高等学校	63
13	羽茂高等学校	69

（様式1）

新向高 第213号

令和3年3月16日

高等学校教育課長 様

学番 10

県立新潟向陽高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

新潟向陽高等学校	
【テーマ】	単位制を生かした魅力的な学校づくり ～ ICT環境を生かした授業等の取組～
【目標】	令和2年度入学生から、新潟向陽高等学校は単位制による全日制課程に改組された。 この改組に伴い、ICTを有効活用し、魅力的な学校づくりを行う。
【取組の概要】	単位制への改組方針の実現 1 進路実現を見据えた基礎学力の養成 (1) 魅力的で多彩な科目選択プランを設定し、生徒の意欲・関心を高め、進路実現を図る。 (2) 国語・数学・英語で各年度3単位以上を全員必修とし、基礎学力を保障する。 (3) 数学で習熟度・進路別にクラス編成を行う。 2 探究的な学習による「主体的・対話的で深い学び」の実践 3 ICTルームの活用による多様な学習形態の実現 (1) ICTルームにおいて、探究的な協働学習、学習成果の発表を行う。 (2) 授業や補習、放課後の時間などで、生徒の実態に合わせた個別最適な学習を可能とする取組を探究する。 (3) 上記を実現するため、校内研修体制を整え、すべての教科及び特別活動で全職員がICTを活用できるようにする。
【取組の成果】	単位制高等学校への改組に伴って、履修ガイドの作成や履修ガイダンス・履修指導を丁寧に行うことにより、生徒一人一人の得意分野や関心のある分野に合わせた科目選択を行わせることができた。 MDM（Mobile Device Management）やタッチペンの導入によって、iPadの使用及びICTルームの活用に関して、利便性が増した。そのため、ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」を促進するための授業実践が活発に行われるようになった。また、ICTを活用するための職員研修や公開授業週間が設定され、授業改善に向けた職員の意識も高まってきた。

ICT環境を生かした授業等の取組

1 取組の内容

(1) ICTルーム・ICT機器を使用した授業実践

ICTルームの機能を活用した授業(例)

家庭基礎(1年)「災害時を意識した暮らしを考える」

導入 避難を見据えて、「非常持ち出し袋」の中身を考える

展開 ・具体的な事例(河川氾濫)をもとに、備えを考える

…スクリーンにて動画の視聴

・様々な緊急事態を想定し、備え(ライフライン停止への備え、住まいの備え、その他の備え)を考える。

…個人でワークシートに記入後、グループで討議。「Edutab(エデュタブ)」を用いて各グループの意見を教室全体で共有。

「Edutab(エデュタブ)」

= 一人一人の生徒がiPadで回答した内容をスクリーンに同時に映し出し、教室全体で情報を共有する協働学習支援システム

・各自の避難場所を調べる。

…地方自治体のHPから、自宅のある地域の避難場所について、iPadを用いて検索。

まとめ 本字の学習内容を振り返る。

図書館機能を生かしたICTルームの活用

地理B(2年)、世界史B(3年)

iPadによる情報検索と図書による情報検索を併用することによって、検索の素早さと情報の正確さを使い分けて「世界の国レポート」・「世界史新聞」を作成する。

美術(3年)

自分に関する内容の本を制作する活動で、製本についての工夫や装丁などについて、iPadによる情報検索と実物の図書を手に取ることで、アイデアを練る。

iPadを活用したミニテスト、自習課題の取組

世界史A(1年)、日本史B(2年)、化学基礎(2年)、物理(2年)等

QRコードを印刷したプリントを配り、生徒はiPadからQRコードを読み込んで問題に取り組む。生徒一人一人の理解度等に応じ、それぞれのペースで問題を解き進める。自動採点をし、エクセルで集計することも可能である。

iPad用の教育アプリを活用した取組

日本史B(3年)

県立文書館のHPからダウンロードした古文書の写真をiPadのピンチイン・ピンチアウト(拡大・縮小)機能を用いて読み解く。

数学(1年)

関数アプリを用いて、数値・数式の変化によってグラフが変化することを実感させる。

【魅力と活力】実施報告_1_（新潟向陽高校）

スポーツ（2年・体育コース）

カメラアプリで生徒一人一人の器械運動の動作を動画撮影し、すぐに本人がスロー再生などを用いて動作の確認をする。また、撮影された動作を複数の生徒が同時に見ることで、改善点等を共有する。

学習成果の発表について、iPadを用いた生徒の相互評価

化学基礎（2年）、物理（3年）等

調べ学習のグループ発表について、発表後すぐに生徒が発表内容をiPad上で評価し、その評価を即時に教員が集約し、その場で発表グループにフィードバックする。

iPadを用いた授業アンケート

数学（1年）、物理（3年）、化学基礎（2年）、生物（3年）、保健体育（2年）等
生徒はiPad上でアンケートに回答し、集計用のコンピュータで自動集計をする。



iPadでのインターネット検索



Edutabを用いた協働学習



iPadカメラでビデオ撮影



ミニテスト読み込み用のQRコード

(2) 「ICT活用・授業改善委員会」の活動

新入職員オリエンテーション(4月)

ICTルームやEdutabの使い方について説明した。

iPad使用規程の整備(4月)

iPadの使用・貸し出し、アプリのダウンロード等について、生徒の使用規程と教職員の使用規程を作成した。

職員ICT研修(5月)

ICTルーム、ICT機器を使用した授業のための職員研修を実施した。

職員ICT研修(8月)

ビデオ会議アプリ(Google Meet、Webex)のインストール、使用方法に関する研修を実施した。

MDM(Mobile Device Management)の導入(8月)

各種MDMの導入を検討し、Macコンピュータを購入することによって、MDMの導入を実現した。これにより、iPadの安全性が確保され、教育用アプリの一括ダウンロードも可能となった。

公開授業週間の設定(11月)

例年「学校評議員会(6月)」、「地域の声を聞く会(11月)」に合わせて行われていた公開授業(年2日)を一週間継続し、全教職員が最低一回は期間中に授業を公開することとした。また、「ICTの活用」、「主体的・対話的で深い学び」を公開授業のテーマとした。

授業アンケートの試行(1~2月)

生徒に対して3つの観点(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性)から授業に対するアンケートをとった。来年度の本格実施に向けた試行であり、委員会への結果の提出は不要とし、どの授業でアンケートをとるか等は授業者に委ねた。

授業「実践集」の作成(3月)

気軽に多くの職員がICTを活用できるように、ICTを活用した本校職員による実践例を収集した授業のアイデア集を作成している(3月現在未完成)。

2 取組の成果

上記「1 取組の内容」(1)以外でも、ICTルームやiPadを活用する授業が増えている。いずれの授業でも、生徒からは主体的に課題等に取り組む姿勢が見られた。特に、協働学習を行う上で有効に活用することができた。

生徒からは、次のような感想が聞かれた。

- ・グループだけでなく、iPadを使ってクラス全員の意見を見ることができるのは、とても効果的だった。
- ・iPadを使ったほうが普段自分の口で意見を発することができない人もやりやすいと思う。
- ・グループの人の意見を聞くだけでなく、それをきっかけになかなか話さない人とも話をすることができた。

また、ICTルームの活用が刺激となって、普通教室でもコンピュータ、プロジェクター、スクリーン等を用いた授業が増えている。職員間に、電子黒板やWi-Fi、iPadを活用した授業を行おうとする機運が高まってきたことも成果の一つである。

3 総合所見

現在、校内でもSNSの使用から様々な問題が生じており、iPadの管理が今年度当初の最重要課題であった。8月にMDMを導入し、iPadの一元管理が可能となったことで、授業で使用する上での安全性が確保された。また、MDMの導入により、アプリの一括ダウンロードも可能となった。そのため、ICTルームとiPadの利便性が大きく向上し、多くの授業で活用されるようになった。

GIGAスクール構想のもと、令和3年1月以降、普通教室に電子黒板とWi-Fiが整備され、本校にはiPadが233台配備された。これらの令和3年度の本格的な運用に際して、本事業で得た知見を十分に生かし、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を推進していく。

今後、ICT機器の使用について苦手意識を持つ教職員も、その苦手意識を払拭できるように職員研修などを積極的に行っていく。また、主に放課後や補習時に、生徒の実態に合わせた「個別最適な学び」を可能とするよう、その方法を検討していく。

4 今後の取組

(1) ICTルームでの授業実践と普通教室での授業への還元

ICTルームでの授業実践を積み重ねていく。また、それを授業「実践集」や職員研修等を通じて、GIGAスクール構想のもとでの授業実践に生かしていく。

(2) 互見授業週間の実施

地域の声聞く会の実施に合わせて、一週間の互見授業週間を設定する。授業を公開すること以上に、お互いに授業を見学することに重きを置き、ICTの活用や「主体的・対話的で深い学び」の実践について知見を得ることによって、授業改善につなげていく。

(3) 授業アンケートの実施

本校では、単位制のもとで生徒に授業選択を委ねるため、授業を通じてどのような力を身につけさせるのかを明確にし、授業の質的向上を図る必要がある。そのため、生徒に対して3つの観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性）から授業に対するアンケートをとり、授業改善に生かす。

高等学校教育課長 様

学番 13 県立巻総合高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。
記

巻総合高等学校

【テーマ】 生徒の夢を叶えさせ将来の地域産業を担う人材育成の取組
～「巻総CHAT」プロジェクトが地域を活性化する～

【目 標】

系列間連携による取組「巻総CHAT」プロジェクトや高大連携授業により、生徒の課題解決能力の向上を図る

【取組の概要】

「巻総CHAT」プロジェクトにおける地域貢献活動や様々な催事への参加により、地域理解を深める

新潟国際情報大学と連携した授業を実施する

学校支援アドバイザー協議会を開催し、学校運営の改善を図る

地域企業の職場見学を実施する

地域企業による「校内企業説明会」を実施する

【取組の成果】

総合学科の特徴を生かし、職業に関する4系列(食料環境、工業、商業、生活文化)の生徒が「巻総CHAT」プロジェクトの中心となり活動できた。

地域の催事等に参加することで、生徒の勤労観・職業観の育成を図り、職業に関する4系列から、関連分野への就職者、進学者の割合を増やすことができた。

地域活性化をテーマに、新潟国際情報大学や学校支援アドバイザーと連携し、地域が抱える諸問題の理解及び問題解決能力の向上を図り、生徒自らが考え、積極的に行動できるようになった。

学校が「元気の発信地」となり、次世代の地域を担う人材の育成につなげることができた。

取組の内容

令和2年度の活動

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、各種イベントへの参加などの活動に制約が多くあった。例年実施している、2年次のインターンシップをはじめ地域交流や販売活動等、当校の良さ、特色をアピールする機会がほとんどない1年となったが、新しい生活様式のもと新たな活動を創造し、模索してきた。

1 朝光祭(文化祭)

令和2年11月6日(金)に朝光祭を実施した。新型コロナウイルス感染症対策のため当校生徒および職員のみでの開催となった。「巻総CHAT」の活動紹介、体験コーナーを設置するなどして、他系列の生徒の活動について多くの生徒が理解を深めることができた。



【生活文化系列】



【工業系列】



【食料環境系列】



2 新潟国際情報大学と連携した講義



3 キャリア教育、進路意識を啓発する講演会

令和2年3月10日(水)「心の教育 懸命に生きる人々～日本人にこそ学んでほしい～」

令和2年3月11日(木)「過去の自分に負けない様に今を生きる」

- ・豊かな心とは何か。懸命に生きる人々から命の大切さを学ぶことができた。
- ・失敗から自分に負けない思考、意識づくり、これからの人生を考えるきっかけとなった。

【魅力と活力】実施報告_2_（巻総合）



4 地域と連携した伝統野菜の栽培と活用の試み

在来の晩成菊である「りゅうのひげ」の復活・特産化に取り組む地元「りゅうのひげ会」と連携し、同会から苗の提供や講師の派遣、指導を得ながら、食料環境系列、生活文化系列で栽培や料理への利用に取り組んだ。



3年間の取組(平成30年度から)

1 にいがたカナル彩参加

平成31年4月29日(月・祝)に新潟県スポーツ公園を会場に、新潟県都市緑化フェアとNIIGATAスプリングフェスティバルの合同イベント「にいがたカナル彩」が開催された。当校は農場で育てた花を販売した。さわやかな新緑の中、生徒が丹精込めて育てた花は多くの来場者から購入していただくことができた。



2 「巻総CHAT」活動による米の生産・販売活動

「巻総CHAT」活動の取組における「オリジナル米袋・ラベルの製作」をさらに発展させることを目標とし、食料環境系列、商業系列、工業系列、生活文化系列の系列間連携による米の生産・販売活動に取り組んだ。米の商品名は「まき乃夢」とし、年間をとおして4系列が関わって活動する形態を構築することができた。

(1) 田植え

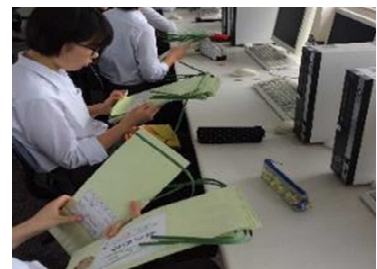
食料環境系列の生徒は機械での作業だったが、販売を担当する商業系列の生徒は、商品を理解するため、田植えをすべて手作業で行った。工業系列の生徒はドローンを飛行させ、撮影することにより、苗の育成状況を把握するなどして、複数の系列が関わりをもって取り組むことができた。

【魅力と活力】実施報告_2_(巻総合)



(2) オリジナル米袋・ラベルの製作

米が収穫できるまでの間に、オリジナル米袋とラベルのデザインを考案した。弥彦山や角田山など、巻らしさを生かしたデザインとし、消費者に手に取ってもらえるような工夫を凝らした。作成は業者に依頼したが、紐をつける等の工程は生徒が行うこととした。



(3) 収穫(稲刈り)

稲刈りも、田植えのときと同様に商業系列の生徒が参加した。多数の生徒が作業したが、およそ6反の田んぼは広く、疲れた表情であったが満足げな様子でもあった。



(4) 「まき乃夢」の袋詰め

J Aによる検品後、精米した米を米袋に入れた。生活文化系列の生徒のアイデアで、米袋の中には唐辛子を入れた虫除け袋をつけることとした。袋の制作は生活文化系列の生徒が行った。



【魅力と活力】実施報告_2_ (巻総合)

(5) 「まき乃夢」の販売



3 第29回全国産業教育フェア新潟大会「作品・研究発表部門」出場

令和元年10月27日(日)朱鷺メッセにおいて開催された大会で、全国の専門高校等で学ぶ生徒が、学習や実験・実習等で創作した作品・研究の成果等について発表する「作品・研究発表部門」に出場した。これまでの探究活動の成果と今後の課題について発表し、当校の特色ある活動を発表することができた。県外からの来場者には「まき乃夢」を進呈し、後日、感想の送付をお願いした。「香りが良く、とてもおいしい」などの感想が多く、概ね好評であった。



4 インターンシップ

2年生全員が夏季休業中の3日間に地元企業でインターンシップを行った。参加した生徒の多くは「挨拶・言葉遣いの大切さ」や「働くことの厳しさ」を学ぶとともに、地域企業のことを知り、その魅力を直接感じ取ることができた。



取組の成果

「企業説明会」や「地域活性化の取組」のための講義、キャリア教育や進路への意識啓発のための講演を行い、勤労観の醸成と地域企業への理解の深化により、進路への意識啓発を促すことができた。
 地域の活性化をテーマに、新潟国際情報大学や学校支援アドバイザーと連携し、地域が抱える諸問題の理解及び問題解決能力の向上を図り、生徒自ら考え、積極的に行動できるようになった。
 学校が「元気の発信地」となり、次世代の地域を担う人材の育成につなげることができた。

総合所見

地域の様々な催事等に参加することで、生徒の勤労観・職業観の育成を図ったことにより、職業に関する4系列から、関連分野への就職者、進学者の割合の増加につながったと思われる。
 「巻総CHAT」の存在が、系列ごとの強みを「学校の強み」として捉えることにつながったと思われる。
 同年代の生徒だけではなく、指導・助言を受けた地域の方など「大人」と接する機会が多くなることは、貴重な経験であったと思われる。

今後の取組

これまでの流れを継続し、系列間連携による「巻総CHAT」の活動をとおして、各系列と地域が連携した巻総合高校独自の取組を発展させていく。
 制作物・成果物を見てもらう場面を多く設けるとともに、農産物などを活用した活動などにも力を入れていく。
 「地域住民に周知する」、「地域と連携する」という活動において、小学校や中学校など「地域の子ども」という視点も取り入れていく。

【年度毎の自己評価結果（数値目標）】

評価項目		令和2年度 （3年目）	令和元年度 （2年目）	平成30年度 （1年目）
職業系列からの関連分野に進む者の割合	系列	数値目標60%以上	数値目標60%以上	数値目標55%以上
	食料環境	36.7%	34.5%	40.0%
	工業	90.5%	70.4%	91.7%
	商業	46.0%	46.2%	51.2%
	生活文化	72.5%	72.5%	44.7%
	全体	48.8%	52.8%	52.2%
「巻総CHAT」生徒のアイデアの取組	—	数値目標2組以上	数値目標2組以上	数値目標1組以上
	全体	2取組	3取組	2取組

R2年度生徒アイデアの取組

「りゅうのひげ」の栽培

朝光祭において「巻総CHAT」の活動紹介・体験コーナーの設置

(様式1)

新津高 第242号

令和3年3月15日

高等学校教育課長 様

学番 15 県立新津高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

新津高等学校
【テーマ】 「大学進学を重視した学究型の高校」を目指した学校作り
【目標】 1 大学入試改革への対応及び国公立大学合格者数の増加を図る。 2 難関大学合格者数の増加を図る。 3 新津高校の良さをPRする。
【取組の概要】 最終年次にあたり、改革の定着を図り、特色化することを目指し、下記の取組を計画した。 (1) 国公立大学、難関大学の合格者を増加させる。 (2) 本校の活動を特色として広報し、本校への志願者の増加につなげる。
【取組の成果】 いまだ新津高校のグランドデザイン化には至っていないが、生徒、学校の現状・今後の課題の議論は日常に行われ、組織的な取組にしようという動きが出てきている。 探究型の活動については、「総合的な学習・探究の時間」を核に教科間でも相互的に配置された。課題探究の指導を経験した教員が増えてきたことで、教員の中から新しいアイディアが生まれるようになり、指導方法は更新され続けている。 今年度の3年生は、新津高校の「総合的な学習の時間」を体系化した最初の学年であり、3年間の探究活動と進路選択・受験との関わりが注目される場所であった。生徒アンケートでは、関わりが顕著に見られる結果となっており、探究学習が教科にも役立つという解答も多く、生徒の中に探究で得た「型」や知識・知的好奇心を教科に「繋ぐ」意識が醸成されたことがわかった。教員の働きかけによっては、教科と探究を有機的に関連づけることで学力向上に繋がる可能性が見えたことは大きな成果であったと言える。 コロナ禍において講師招聘が難しく活動が制限された1年間であったが、リモートでの講演会、大学講義体験などを模索する中で、生徒のICT活用の可能性が広がったことは今後の指針となるだろう。また、校内では課題研究の「型」・発表資料の掲示などで生徒の知的好奇心を喚起し、中学生の学校訪問の際の広報活動にも役立て、志願者も増加した。

主な取組の内容

1 生徒の活動

(1) 総合的な学習・探究に関する活動

ねらい

生徒の思考的・主体的な学びの姿勢を育成するため、新津高校としての3年間の体系的なプログラムを作って3年目にあたる。「探究の見方・考え方を働かせ、社会の一員としての自己の在り方生き方を考え、次代の社会を創るという観点から課題を発見し、他者と協働して解決に向かう普遍的な資質・能力を育成する」ことを目的として、1年生は「社会を繋ぐ」2年生は「学問を拓く」3年生は「進路を創る」をテーマに、課題探究型の学習を中心とした活動を実施した。

今年度は年度当初に臨時休校があったが一斉登校や分散登校を利用して、下記活動を実施した。

内 容

ア 1年生

今年度1年生は総合的な探究の時間を大きく2つに分け、自己理解を目的とした前期(4月~9月中旬)と探究の型を学ぶ後期(9月下旬~3月)とした。

(ア) 前期

目 的 過去の人生を振り返り、現在の自分自身の興味関心のありかたを社会や学問とのつながりから考えることで自己理解の向上を図る。

9月末の文理決定のための、文系、理系の特徴などについて理解する。

内 容

4月 総合探究オリエンテーション

・関係の質の向上(アイスブレイク) ・探究とは?

5月 自分の興味・関心ワードと学問との社会

・学問とのつながりを考える

6月 自己理解を深める

7月 身の回り・社会のテーマから学問・仕事のかかわりを考える

8月 大学調べ・オンラインオープンキャンパスに参加

(イ) 後 期

目 的 自分の興味関心から社会課題を発見し、*SDGsの視点を取り入れる。

一連の探究サイクル(課題設定 調査 整理分析 まとめ・表現 振り返り)を回すことで探究の型の習得を目指す。

内 容

9月 社会と学問 SDGs講演会 講師:JICA新潟デスク 宮由衣氏

10月 探究講演会 講師:アイデアパートナーズ 山本一輝氏

10月~3月 課題解決学習

12月 中間発表

3月 発表会

イ 2年生

(ア) 大学講義体験

外部講師招聘による講義体験は中止

(イ) 課題研究

目 的 現状から課題を見出し、答えのない問いに協働して試行錯誤する経験をする。

「型」を使った探究の仕方を習得する。

内 容

4月 「課題研究」オリエンテーション

5月 夢ナビ大学講義体験

6月~12月 課題研究

1月 クラス別発表会

1月~3月 個人論文作成

3月 学年発表会



(2) 特進クラスの特徴化

ねらい

国公立大学や難関大学への進学を希望する生徒を支援し、学習意欲や高校生活すべてにおいて新津高校の中心的役割を果たす生徒の育成を目指す。

内容

- ア 夏期合宿 今年度はコロナ感染拡大予防のため中止。
- イ 平常時講習
- ウ 難関大学向け模擬試験の全員受験
- エ 外部講習会参加(数学オリンピック等)

(3) その他の取組

今年度は、3年間の探究的活動を受験に活用できるような働きかけ・仕組みを試行してみた。

生徒の意識付け

「志望理由書」作成、面接準備のために自分の今後のビジョンを確認する「ビジョン可視化シート」を作成し、その中に「総合的な学習の時間」の項目を設け、自分の将来とどう結びつくかを確認できるようにした。

指導教員の意識付け

小論文・面接指導依頼文に、生徒が3年間「総合的な学習の時間」や小論文学習でどのような活動をしてきたかを明記し、指導の際に役立ててもらおうようにした。

2 教員研修

(1) ねらい

3年時は探究活動の指導に携わった教諭の感想や意見をもとに、次年度に生かすことに重点を置いた。

(2) 内容

- 4月 1, 2年生担任・副任に対する「総合的な探究の時間」における活動説明と指導依頼
- 5月～12月 活動時の気になった点を記入・共有

取組の成果

1 生徒の活動

(1) 総合的な学習・探究に関する活動

アンケート結果、生徒の感想

ア アンケート結果(図1～3のとおり)

「取り組む姿勢」については、1, 2年生ともに98%が「一生懸命に取り組んだ」と回答している。

イ 生徒の感想

【1年生】

- ・一つのことを深く学べば色々なことへの見方が変わってくる。
- ・テーマが身近にあることに気づくことができた。
- ・一見関係ないと思った事にも様々な身近な課題があり、自分達でも努力すれば解決に繋がると分かった。
- ・探究活動により、新しい課題が生まれ、その対策をまた作るといった面白さがあると気づきました。一つ一つの情報がどんなことに役立つのか、学ぶことが出来ました。
- ・あらゆる物事を知ろうとするにはまず好奇心が必要だし、その物事から「すごい!」と思うような魅了されるものを発見することが大事。
- ・SDGsには関係ないと思っていたいつも読んでいた雑誌から今回の研究テーマとなるものが見つかった物事は繋がっているのだなと思った。

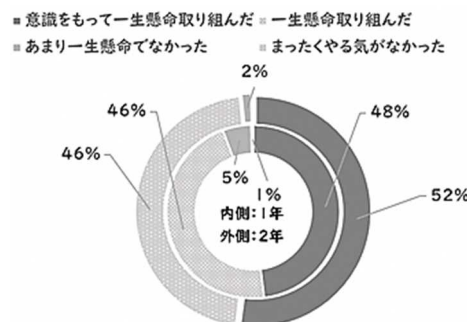


図1 「探究活動の一連の流れを理解できたか」

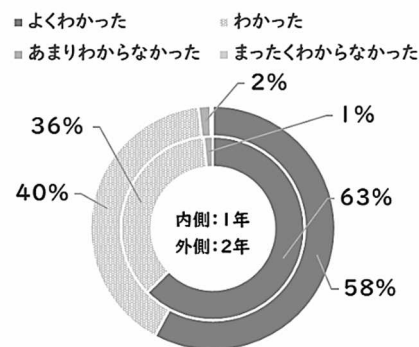


図2 「『論理的』ということを理解できたか」

- ・興味を持っていることを研究することはすごく楽しいということがわかった。自分の興味や好奇心を大事に日々の授業や生活に活かしたい。
- ・自分が知っている世界はほんの一部だけで、初めて知ることができたことが沢山あった。学校での探究活動がないと、自分が興味のあることに気づくことがないのでいい機会でした。

【2年生】

- ・研究の仕方にも、順序があることを知り自分のものにできた。
- ・今まで自分には関係の無いことだと思っていたものや、当たり前前に感じていたものを1度止まって自分で考えてみると様々な気づきや発見があって面白いと思った。自分の考えと人の考えとを比べるのも新たな発見に出会えるプロセスの1つになると思い、話し合うことが大切なのだと思う。
- ・自分では筋が通っているつもりでも、周りから見ると分かりづらかったり、疑問点が多く出てしまったりすることが分かり、「論理的」は難しい。
- ・1つの分野でも人によって違った見方ができて、色々な視点から物事を見ることの大切さを知った。それを踏まえると班で意見がバラバラになってしまうのも理解出来る。全員の意見を反映させるにはどうしたら良いかをみんなで考えていくことが大事だと気づいた。
- ・身の回りの何気ない疑問や問題が大きな社会問題に簡単に繋がってしまうということを改めて実感した。小さな問題が大きな問題を解決する鍵になることをしっかり理解できた。
- ・自分達が思っていたことと調べたことの実事を照らし合わせ、そこから生まれた新たな課題発見が面白かったです。今回得た学びの経験で沢山の人の助けを借りられたら良いなと思った。
- ・何かを考えるとき、ただそういうものだと思うのではなく、違う視点を掘り下げてみると意外な側面が見えてくることがあり、探究は面白いと気づいた。これからは日常でも「どうしてこうなのか？」を大切にすることで、突き詰めて考える力を養っていきたいと思った。これは勉強にも助けになる力だと思う。
- ・一見社会と繋がっていないと思うようなことでも繋がっており、思ってもいないところから社会貢献ができることがわかった。また、すでに回答がネットで出てくるものでも視点を変えれば新たな考え方や回答が出てくるから、自分で考え理解しなければ意味がないとわかった。
- ・自分の意見を言うのは不安だったが、班員に否定されることは一度もなく、聞き入れてくれてとても嬉しかった。その意見を後々の論文で生かす深めることができたので、自分の意見は積極的に話し、相手の意見を肯定することはとても大切だと痛感した。
- ・調べる題材はなんでもよく、疑問を設定し仮説を立て、それについて考え、検証と分析をし、自分なりの考えを持ちそれを主張するという行動に意味があるのだと考えることが出来た。
- ・目標へとむかって何かしらの切り口を見つけ、それを伸ばしていくという考えが生まれた。

評価と検証

3年間をとおして「論理的思考・表現」や「探究の手順」などの「型」を身につけさせることを目標とした指導を図った。図1～3から、1, 2年生ともにそれぞれの「型」に対する意識は高まったことがわかる。

1年生の感想からは、「探究」に触れた新鮮な驚きや発見、楽しさが感じ取れる。1年時は「探究」に対する「芽」を芽生えさせることは大切だと考える。2年生になると研究期間も長くなり、求められるものも高度になるので、「難しさ」を実感する感想が増えた。それが、図1～3で2年生の肯定的な回答が相対的に少ない理由でもある。しかし、1年間の活動で2年生が得たものは教員側の期待を越えて幅広く、かつ1歩踏み込んだ具体的なものが増えている。「型」はもちろん、社会の在り方、役割意識、協働の大切さ、進路意識に至るまで多岐に渡っていた。その思いが今後の生活に「繋がる」ように期待し、指導していきたい。

図4, 5は「探究活動をする前後でどう変わったか」を自己評価した結果である。それぞれの力に対する意識は高まっていることがわかる。特筆すべきは、活動前「計画立案力」(仮説を立てる力)の低さである。新津高校生の弱点の1つと言えるだろう。「仮説」を立てる力は各教科に直結する部分なので、実践できるようになれば学力向上に繋がる可能性があると考えられる。アンケートを分析し、教科と連携し可能性を模索していきたい。

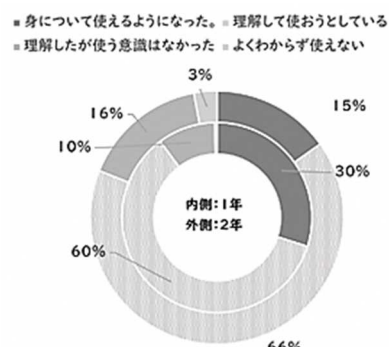


図3 「表現の『型』を理解し身につけたか」

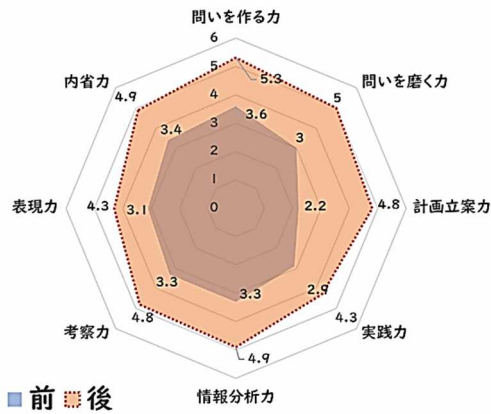


図4 探究活動前後の変化(1年生)

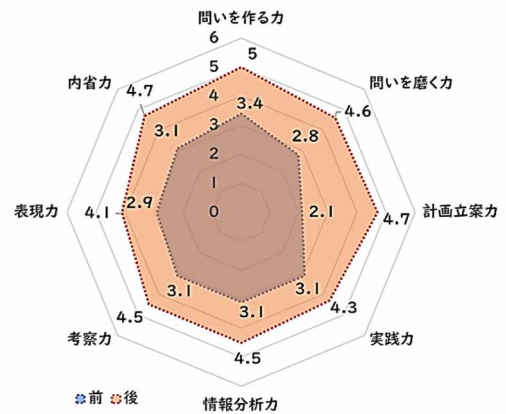


図5 探究活動前後の変化(2年生)

(2) 特進クラスの特徴化

特進クラスは、学力はもちろん学びやその他の活動に対する高い意識の醸成という点でも効果が見られる。コロナ禍で外部講習参加が限られたものになる中、難関大学等の学生とのリモート座談会や有志による地域との連携活動などに積極的に参加し、リーダー的な役割を果たしているのは特進クラスの生徒である。社会とのつながりや知的好奇心を喚起することで、学びに対する動機付けが明確になっていく様子がうかがえ、特進クラスに限らず教科学習と平行して行う経験的、探究的な学びが学力につながる可能性も見えてきたように思う。

(3) その他の活動

アンケート結果、生徒の感想

ア アンケート結果(右図・グラフ参照)

イ 生徒の感想

- ・大変だったが、総合型選抜で役立った。
- ・完全に正解に辿り着くことは難しいことが多いが、自分はどう思うかをまとめられたことは受験でも役立った。
- ・私の場合は受験で細かく聞かれたので、やった内容をしっかり記録しておいて良かったなと思います。
- ・探究活動をとおして、自分の夢が見つかった良かった。
- ・レポートをまとめる時の行程が受験に役立ったし論文の書き方がわかった。計画的に考える力がついた。
- ・常に疑問を抱くようになった
- ・問いに対して粘り強く考える考察力が身についた。
- ・大学の授業に、そのまま役立つような活動でとても良かった。レポートの書き方やグループディスカッションの進行の仕方を学べたので、大学の授業で利用したい。
- ・主体的学習を心がけるようになった。自分から率先して学ぶ姿勢を身につけた。
- ・政治や経済を調べることで日本の社会構造を知ることができ自分がやりたいことを見つけられた。

評価と検証

図6から、探究活動が直接的に受験に役立ったと意識している生徒が70%近くいた。学校推薦型選抜や総合型選抜に利用したということだけでなく、教科学習や進路選択にも影響を及ぼしたということが、図7や生徒の感想からもわかる。受験前、受験時に3年間の活動を振り返らせることで記憶を呼び戻し、記録を確認させることで生徒の中で受験と探究活動を繋ぐことができたのではないかと考える。「語るものが自分の中にある」ことを確認させることは大切な受験指導であると実感した。

(4) 数値目標の達成状況

達成状況

- ・生徒授業評価「興味・関心」「理解」「基礎学力」項目の満足度を上げる。
「学校自己評価」学校生活アンケート結果(カッコ内は「よく」+「やや」を足したもの)

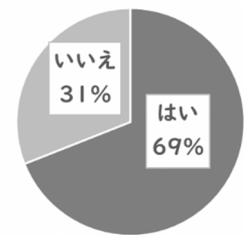


図6 探究活動は受験に役立ちましたか。

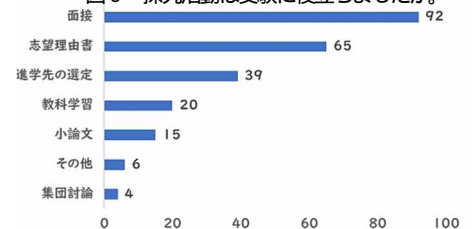


図7 どの場面で役立ちましたか。

「よく当てはまる(そう思う)」「やや当てはまる(大体そう思う)」の回答率

	平成30年度	令和元年度	令和2年度
分かりやすい授業が多い	62%(17%+45%)	61%(18%+43%)	62%(15%+47%)
授業では教材や教え方に様々な工夫がされている	68%(23%+45%)	71%(31%+40%)	67%(22%+45%)
学力向上のための指導が熱心に行われている	82%(40%+42%)	82%(45%+37%)	82%(38%+44%)
家庭での学習のため、十分な課題が出されている	85%(58%+27%)	88%(59%+29%)	86%(56%+30%)
総合学習は充実している	70%(33%+37%)	81%(47%+34%)	87%(51%+36%)

- ・1年1月 ... 偏差値68以上 5人(5人)、58以上37人(60人) カッコ内は目標値
- ・2年1月 ... 偏差値68以上 2人(10人)、58以上23人(70人)
- ・合格者数 ... 国公立53人(110人、短大含む)うち難関大1人(10人)新潟大20人(45人)(3月10日現在)

評価と検証

授業評価については昨年度ほどの評価は得られず「よく当てはまる」の数値は下がった。学校自己評価を活用して学校の現状や課題を把握し、授業改善等に繋げる姿勢が必要なのではないかと考える。

模試結果は、各学年・教科とも真摯に受け止め、現状分析、課題の洗い出し、指導法を検討中である。しかし、ここ数年の生徒の入学時の学力や入学人数の変化を考えると、単純に数だけでは計れないものがあるようにも思う。例えば、今年度の3年生は280名定員のところ259名の入学と極端な定員割れを生じていた。基礎学力を計る「スタディーサポート」においても国公立大学合格圏内と言われているA3ゾーンには、入学時26名しかいなかった。しかし、3月10日現在の国公立大学合格者(国公立短大含む)は53名となっている。過去3年間の経緯は下表のとおりである。何をもって生徒の学力の伸びを計るかは難しいが、このような数値を1つの指針として「生徒の学力を伸ばす」新津高校であるために、生徒の現状を的確に把握し、明確になった課題を確実に解決していくことが大切である。

	スタサポ1年第1回A3	国公立大学合格者
平成28年度入学生(280名)	34名	58名
平成29年度入学生(283名)	54名	109名
平成30年度入学生(259名)	26名	53名(3/10現在)

総合所見

1 学校・生徒の変化

新津高校には、知識を暗記してそれをアウトプットする作業的な学習方法を続けてきた生徒が多い。高校になって学習内容が増えると追いつかなくなり、追い込まれやすくなる。そこで、本質的な部分での教科間の「繋がり」を見いだすことで汎用力を高め、まずは生徒が感じている負担感を軽減できないか、その役割を教科横断型の「総合的な学習・探究の時間」でできないかと考えたことが、新津高校の体系的な3年計画に繋がった。「論理的思考・表現」「探究の手順」の型の習得を目指した大きな理由である。

3年間をとおして「探究型」の活動は定着したと思われる。「学校自己評価アンケート」では生徒の探究活動への意識が高まっていることもわかる。先輩の活動を見聞きし、教員の働きかけを受け入れ、真面目に探究活動に取り組む姿勢は新津高校生の美点である。生徒の中に芽生えた新しい芽をいかに育て、進路希望の実現・社会貢献への寄与に繋げていくか、教員側の意識と資質が問われるのではないだろうか。

2 課題

受験生減少に伴い新津高校の特色を広く広報していく必要を強く感じる中で、「新津高校の目指す生徒像、目指す学校の在り方」を全教員の共通理解のもとに明示できなかったことは残念である。高校におけるグランドデザイン化の難しさを感じる。まずは「新津高校の良さ」の共通認識が必要であろう。

探究活動が即大学進学と繋がるわけではない。教科指導とのバランス、相互性等を全教員が意識し、生徒の中に芽生えた「繋ぐ」意識を育て、計画的・有機的に学力に繋げるような指導を模索することが大切だと考える。

今後の取組

1 探究活動の質の向上と継続性

探究活動の基本的な指導方法を検証し、「新津高校メソッド」等を作成する。

探究活動の成果を、生徒の進路実現に繋げる。

2 新津高校の特色化

新津高校のグランドデザインを明確にし、職員間で共有し、特色化に繋げる。

新津高校の特色を広く広報し、志願者増に繋げる。

(様式1)

松 高 第 155 号

令和3年3月26日

高等学校教育課長 様

学番 20 県立村松高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

村松高等学校	
【テーマ】	地域と連携した進路実現を目指して ～地域と共に1UP～
【目 標】	<p>これまでの本校の取組を活かしながら、地域人材や地域資源を活用した教育活動の可能性を広げ、看護系の人材育成を期待する地域のニーズに応えていく。また、計画実施にあたっては、生徒のやる気を引き出し、生徒の夢を叶えさせる進路指導の実践によって、学校の活性化、魅力化につながる教育活動となるよう取り組む。</p> <p>進路意識の啓発を行うことで、自らの課題を発見し解決に向けた取組ができるよう、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間の充実を図る。</p>
【取組の概要】	<ul style="list-style-type: none">・1年生を対象とした高校生活についての講演会の実施・3学年を対象とした自己管理手帳を導入してのポートフォリオの作成・1年生を対象とした生徒理解調査の実施・2年生を対象としたインターンシップ事前指導の実施・3年生を対象とした企業等説明会の実施・取組の成果発表会の実施
【取組の成果】	<ul style="list-style-type: none">・1年生では講演会や生徒理解調査を実施することで、早期の進路意識の啓発ができた。・2年生では、インターンシップができなかったことを踏まえ、より充実したマナー講座や面接指導を充実させた。・3年生では自己管理手帳を導入することで、自己の学習内容や経験を蓄積し、学びの価値を再認識できるようになった。企業等説明会はできなかったが、進路ガイダンスの充実を図ることで、一人一人の確実な進路実現に結びつけた。

1 取組の内容

(1) 自己管理手帳の取組

目的

生徒が自分自身の学びの記録の蓄積を一覧することにより、どのような学びのプロセスを経て成長していったかを読み取るために行う。生徒自身にとっても、自分の学習過程を客観的に把握できるとともに、「振り返り」を通して自らの課題を見つけ、次の学習につなげることができる。自分自身の成長の過程を追うことで、次年度の課題をつかむ一助とし、自らの進路を展望できるようにしていきたい。

活用状況と生徒の様子

3年生で継続して使用した。面接指導その他のガイダンスなどで活用した。昨年の継続でもあり、多くの生徒は趣旨を把握し、具体的に記入しようとする姿が見えた。一方で話を聞きながら手帳に記入することに難しさを感じ、十分に記入ができない様子も少なからず見られた。

成果と課題

3年間継続することによって、少しずつではあるが自分の体験や考えを表現できるようになっている生徒も見られ、一定の成果があったと考える。一方、ポートフォリオの意味がなかなか理解できない生徒に継続して趣旨を理解させ積極的に取り組んでいけるように手助けしていく必要性も感じた。今後もこの経験を生かし、他学年での取組に活用できるようにしていきたい。

(2) 講演会の実施

「新入生進路意識啓発講演会」【1年生】

ア 目的

新入生に高校生活の過ごし方を説くことをとおして、高校生としての自覚を芽生えさせる。また、自身の生き方・在り方について考えさせる。

イ 実施状況

実施日 令和2年8月3日(月) 1～3限

会場 本校会議室

講師 新潟会計ビジネス専門学校副校長 平 博之 氏

演題 「心の授業」

ウ 生徒の様子

夏季休業中の総合的な探究の時間で実施。多くの生徒が緊張感をもって真剣に話を聞いていた。

エ 成果と課題

例年入学後間もない時期に行っていたが、今年は夏季休業中となった。まだ少し緊張感がある中での講演となったが、貴重な話を聞く機会を設けることができて良かった。真剣に話を聞くことができる生徒が多いことがわかったことも収穫であった。



【魅力と活力】実施報告_4_(村松高校)

「マナー講習」(インターンシップ事前学習)【2年生】

ア 目的

夏季休業中に行うインターンシップに向けて、マナー全般の重要性を理解させる。

イ 実施状況

実施日 令和2年7月15日(水)6限

会場 本校会議室

講師 新潟ビジネス専門学校 教務部次長
就職相談室室長 平馬 みどり 氏



ウ 生徒の様子

今年はインターンシップが中止となったが、就職活動への意識を高めることを目的に実施した。全員緊張感をもって聴いていた。自分の意思を十分に伝えるためには、先ず見た目・身だしなみが大切であること、言葉遣いが大切であることを認識し、普段の自分自身の姿を見直すきっかけとなったようである。

エ 成果と課題

理屈ではわかっているけれども日常生活の中で、「礼儀、身だしなみ」を「普通」にしていくには時間がかかると思われる。今後は、挨拶は勿論、普段の身だしなみについても自分自身で意識していくことができるような指導を考えていく必要がある。

「面接対策講演会」【2年生】

ア 目的

次年度の面接試験に向けて、その重要性和実践の難しさを知り、心得や方法を学ぶ。

イ 実施状況

実施日 令和3年1月20日(水)6限

会場 本校会議室

講師 新潟ビジネス専門学校 教務部次長
就職相談室室長 平馬 みどり 氏



ウ 生徒の様子

具体的な事例を挙げて細かく説明していただいたことを熱心に聴いていた。

内容が分かりやすく、講師の先生も半数以上の生徒に質問をするなど、生徒は緊張感をもって臨めた様子で、真剣に聴くことができたようである。

エ 成果と課題

進学希望・就職希望にかかわらず、面接に向けた対策は重要性を持つ。まず、その方法を学ぶことから始めるが、習得・実践できるよう日々の生活を見直す必要がある。生徒は日頃の甘さを感じていた様子で、3年生に向けてのよい準備ができた。

「医療・看護系講演会」 今年度実施せず

(3) 上級学校の見学【1年生】 今年度実施せず

【魅力と活力】実施報告_4_（村松高校）

(4) 「五泉市合同企業説明会」（3年生・2年生） 今年度実施せず

例年6月に実施していた。地元就職を希望する生徒にとって、地元企業を知るまたとない機会であったが、新型コロナウイルス感染症対策の観点から今年度は中止とした。代替として7月に新津で行われた合同企業説明会に参加した。地元希望者の多い本校にとっては貴重な機会であるので、来年度は状況を見て実施したい。

2 取組の成果

1年生では講演会や生徒理解調査を実施することで、早期の進路意識の啓発ができた。

2年生では、インターンシップができなかったことを踏まえ、より充実したマナー講座や面接指導を充実させた。

3年生では自己管理手帳を導入することで、自己の学習内容や経験を蓄積し、学びの価値を再認識できるようになった。企業等説明会はできなかったが、進路ガイダンスの充実を図ることで、一人一人の確実な進路実現に結びつけた。

3 総合所見

進路希望の決定状況

「学校生活等に関する意識調査」（2月実施）（%）

右の表は、2月に実施している「学校生活等に関する意識調査」（1、2年生対象）での、「高校卒業後の進路希望は決まっていますか」という問いに対する回答のうち、「（漠然と）決まっている」の割合を示している。今年度については総計が76.4%

	H29	H30	R元	R2
1年	66.7	68.0	61.0	78.0
2年	78.0	70.3	70.8	63.6
総計	72.7	69.3	64.8	76.4

となり、目標の75%を超えたが、学年での差が大きく開く結果となった。2学年の意識が例年並みのレベルまで高まるような仕掛けを考え、地元企業への就職につなげたい。またテストバッテリーM2+（田中教育研究所）の結果等を分析したりして取り組んでいきたい。

今年度の影響と来年度に向けて

新型コロナウイルス感染症対策のため、学校外、地域との連携に関連した取組が計画通りできず、可能な範囲で校内活動を中心に工夫して行うようにした。特に五泉市合同企業説明会ができず、3年生の就職活動に影響が出るかと心配されたが、他の工夫で乗り切り、例年並の就職先を確保できた。来年度の3年生も今年度以上の成果が上がるよう、工夫を重ねたい。

4 今後の取組予定

- ・ 高校生活についての講演会（1年生） ・ 生徒理解調査（全学年）
- ・ 企業説明会（3年生） ・ 上級学校見学（1年生） ・ インターンシップ事前指導（2年生）
- ・ 取組の成果発表会 ・ 地元企業で活躍している人材を講師とした講演会（全学年）
- ・ 介護・福祉・医療・看護分野でのインターンシップの充実（2年生）

(様式1)

村高第230号

令和3年3月16日

高等学校教育課長 様

学番 27

県立村上高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

村上高等学校	
【テーマ】	「未来を共に創る」村高ゼミの実践 ～ グローカルな視点による探究学習の推進～
【目標】	1 3年目になる「英語コミュニケーション能力向上プロジェクト」を推進し、大学進学をはじめとする進路希望の実現に向けた英語4技能の総合的な向上を図る。 2 ICTを活用したカリキュラム・マネジメントによる教科横断型の授業実践を推進し、高大接続改革に対応できる教育課程を編成する。 3 地域課題を中心にした探究学習の推進を通じて、主体的に学ぶ態度及び協働して課題解決に取り組む資質を身に付けさせる。
【取組の概要】	1 進路実現に向けた英語力の向上 (1) 英語コミュニケーション能力向上プロジェクトの実施 (2) 英語等表現力育成に向けた授業研究 2 高大接続改革に対応した教育課程の編成 (1) 校内委員会(村高イヨボヤプラン委員会)による教育課程の検討 (2) ICTを活用した教育及びカリキュラム・マネジメントによる授業力向上のための先進校視察による研修 3 探究学習の推進 (1) 探究の方法を学ぶ講演会の実施 (2) 村高ゼミを通じた探究活動の成果の発表
【取組の成果】	1 本事業の3年間で海外修学旅行(今年度は実施せず)等でのプレゼンテーションや英語コミュニケーション能力プロジェクトの実施により生徒の英語力向上につながっている。 2 村高イヨボヤプラン委員会では、新しい学習指導要領やカリキュラム・マネジメントの研究や先進校視察結果等をおして新教育課程表を作成した。 3 本事業の3年間の取組により生徒は地域と連携した探究学習を進路実現につなげるヒントを獲得し、職員は研究方法や講師招聘等の手法を学んだ。

【取組の内容】

本事業における本校生徒に望まれる人間像と年時取組

(1) 望まれる人間像

生徒に「キャリア形成力」「問いを立てる力と問題解決力」「人間力」「確かな学力」を身に付けさせることを目標としている。

(2) 年時取組

1年時は「社会を知る」2年時は「学問を知る」3年時は「社会を知る」を学ぶ。

(3) 1年の主な取組：「ミラクル1」

- ・ 4月 9日(水) 9月 19日(金) 1月 22日(金) SNSに関する授業：利用法を学ぶ。
- ・ 4月 14日(火) 夢ナビプログラム：(休業期間)自宅で興味ある2分野のレポート作成
- ・ 8月 webオープンキャンパス
- ・ 8月 28日(金) 卒業生4名(大学、専門学校進学者、就職者)による合格体験講話
- ・ 10月 16日(金) 村上探究、フォトロゲイニング：観光名所や寺社仏閣、商店街をチェックポイントとし村上市内を探訪、歴史や経済を探究
- ・ 10月 23日(金) 村上探究発表：巡った名所をポスターで紹介



SNS授業



卒業生講話



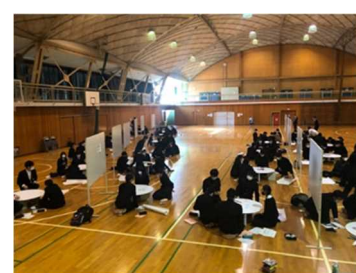
村上探究フォトロゲイニング



- ・ 11月 13日(金) 発表の技講座：村上の魅力ある「鮭」「お茶」「堆朱」「村上牛」での新商品を架空の会社で開発するという想定「2分動画」を34班で作成し相互に発表した。(新潟経営大学経営情報学部准教授 阿部 雅也氏)



発表の技講座



- ・ 11月 20日(金) 12月 1日(火) 4日(金) 18日(金) 大学調べ、ポスターセッション
- ・ 1月 15日(金) 村上市議会議員との懇談会：書面で村上市の施策の意見交換を実施
- ・ 2月 19日(金) 英語コミュニケーション力向上講演会：英語を学ぶ意義と多文化理解について学ぶ(敬和学園大学人文学部 准教授 主濱 祐二氏)
- ・ 3月 3日(水) GTEC受験
- ・ 3月 10日(金) 英語コミュニケーション力向上講演会：英語を学ぶ意義をゼミ生の支援とともに学ぶ(新潟経営大学経営情報学部 准教授 阿部 雅也氏)
- ・ 3月 11日(木) SDGs講演会：国際連合や身近にあるSDGsの基礎を学ぶ(同上)

【魅力と活力】実施報告_5_（村上高校）



英語コミュニケーション力向上講演会



SDG s 講演会

- ・ 3月15日（月） 小論文テスト：生徒の書いた論文の相互評価
- (4) 2年の主な取組：「ミラクル2」
- ・ 7月3日（金） 大学模擬講義体験：県内私立5大学を招き、講義を体験
- ・ 9月25日（金） 主権者教育：模擬選挙（村上市選挙管理委員会）
- ・ 10月2日（金） 「村高ゼミ」ガイダンス
- ・ 10月9日（金）・16日（金） 「村高ゼミ」課題設定
- ・ 10月14日（水） P T A人権教育、同和教育講演会（全校）：中倉 茂樹 氏(止揚の会)
- ・ 10月23日（金）・30日（金） 「村高ゼミ」情報収集
- ・ 11月6日（金） 大学模擬講義体験：県内5大学を招き、講義を体験（1、2年）
- ・ 11月13日（金）・20日（金） 「村高ゼミ」整理・分析
- ・ 2月16日（火） 「村高ゼミ」学年発表準備
- ・ 2月19日（金） 「村高ゼミ」学年発表会：相互評価で選ばれた8班が3月18日（木）実施の村上フォーラムで発表



新潟医療福祉大学 多湖雅博講師



人権教育、同和教育講演会



新潟薬科大学 重松亨教授



村高ゼミ

- ・ 2月26日（金） J A L空育プラン
海外修学旅行は中止とした。代替行事としてキャリア形成力をつけることを目標に、J A Lによる航空業界に関する航空教室やSDG sへの取組、新潟空港の職場見学（車両展示、整備作業見学、客室乗務員体験等）、遊覧飛行を実施した。

<生徒の感想>

- ・笑顔でお客様に接する姿を見て接客された側は倍の笑顔になる。またメッセージカードが手書きであったので人の温かさを感じた。
- ・JALの社員の仕事への情熱を深く感じた。新潟空港職員も私たちの一生の思い出になるよう、たくさんのサプライズ等を組み入れてくれた。行事を考えてくれた先生方を含め、大人の仕事への思いを感じた。将来職に就いたら情熱をもって人と関わられるようになりたい。



JAL空育プラン

- ・ 3月15日（月） GTEC受験

(5) 3年の主な取組：「ミラクル3」

進路実現に向けて各自で研究し、志望理由書、面接練習を通して相互に意見交換を行う。

ア 目的 相互評価によるキャリア形成力と表現力の向上

イ 内容 生徒同士が下記の項目を相互に評価する。

7月 推薦入試並びに就職選考に係る志望理由書作成

9月 推薦入試並びに及び就職選考に係る面接練習

(6) 村上フォーラム：令和3年3月18日（木）

ア 対象 2年が発表 1年が聴講

イ 指導者 静岡大学教育学部 教授 矢野 敬一 氏

ウ 内容 代表8班による研究成果発表会

住み続けられる村上にするには？ 村上市を明るくするため 廃校を救え
高齢者の味方 村上市の観光を増やそう STUDENT FARMING
勉強ができる町村上 観光客を増やすために





村上フォーラム

(7) 英語教育先進校及びICT活用先進校への視察による研修

ア 目的

英語教育に特徴をもった県外の高等学校及びICTを活用した探究活動等の研究に取り組んでいる学校を訪問し、その実際について研修する。

イ 期日及び訪問校

青森県立青森南高等学校 12月9日(水)13:00~15:00

秋田県立能代高等学校 12月10日(木)9:00~11:00

ウ 訪問者 本校進路指導主事(理科)1名 進路指導部員・1学年担任(数学)1名

エ 対応者 主に教頭、進路指導主事

【取組の成果】(生徒アンケートも含む)

(1) 英語コミュニケーション能力向上の推進について

「あらかじめ何を言いたいかを絞ると後々時間をうまく使える。」(令和元年度3年)、
「英語の使い方を楽しく学べた。」(令和2年度1年)とあるように準備することの大切さや学習することの意義と楽しさを理解したようである。また県内大学教授等から最先端の研究や文化論の聴講等をとおして、生徒は大いに刺激を受け、外部試験受験への動機付けとなっている。

(2) 村高イヨボヤプラン委員会による教育課程編成について

教科等横断型のカリキュラム・マネジメントの視点から各教科の配当学年、学習項目を一覧にした「単元配列表」を作成したことと、3年間、英語先進校等を視察し、英語を中心とした主要3教科で習熟度別クラス編成の研究を行い、新教育課程を編成した。

(3) 英語教育先進校及びICT活用先進校への視察による研修

本校のポスターセッションは手書きであるが、能代高等学校ではPCを使用して作成していた。生徒の資料作成レベルの向上を目指したい。青森南高等学校では、外国に直接留学しなくてもタブレットを使用し外国との交流ができる可能性を示唆された。新型コロナウイルス禍では大いに参考になる事例である。

(4) 地域探究学習の推進について

「地域のことに主体的かつ積極的に取り組むことに関心をもつことができた」「研究テーマを自分で決めたので、発想力や地域への興味関心がわいた」「自分たちの考えをプレゼンテーションソフトで資料を作成したが、配色やアニメーションをつける作業が楽しかった。人に伝えるためには客観的な視点が必要である」(令和2年度2年)「大学志望理由書に探究学習を頑張ったと記載できる」(令和2年度3年)とあるように地元村上の理解と地域への探究心を掘り起こす動機付けとして、村上市内の事業所訪問、フォトロゲイニングはキャリア教育を推進するうえで有効な活動と言える。また生徒が主体的に学習することで、学習が自分事への動機付けにつながり、発表方法まで工夫する視点をもつことに気づく。

【魅力と活力】実施報告_5_（村上高校）

また「答のない問題を考え、結論を出すのは難しい。」（平成30年度2年）とあるように生徒は準備する大切さやSDGsのように課題解決に唯一解がないこともあることを探究学習から習得したようである。

【総合所見】

今年度の数値目標と成果

項目	目標	成果
国公立大難関校及び難関私立大学合格数	前者3名、後者4名	難関私立大学達成（青山学院大学、学習院大学、明治大学、東京理科大学）
大学入学共通テスト国公立型出願率	35%	26.5%
国公立大進学率	20%	10.9%
GTECスコア(平均4うちグレード5以上)	8%	達成 約10.0%
部活動加入率	95%	88.4%
学校満足度（1、2学年）	88%	83.5%
学校満足度（3学年）	94%	91.0%

人権教育、同和教育講演会では大勢の生徒が講師に質問をした。講師からは人前で意見表明できる生徒がいて大変驚いたと言葉をいただいた。このように自己表現できる力が生徒につき始めている。また生徒は人の意見を最後まで聞き受け入れる態度も養われている。

3年目を迎えた事業であり、地域商店街訪問等で協力的な商店等が年々増加している。この機運を大切に、地域連携を深めたい。

本事業は「総合的な探究の時間」、教科等横断的な取組が中心である。本校は職員数が30名弱であり、そのため教科、学年、分掌等の枠を超えたコミュニケーション力、カリキュラム・マネジメントが求められる。職員は生徒の成長をみることで同僚性が高まっているが、さらに研修を積み、授業公開月間を設定する等、授業力を強化している。

生徒はこの3年間で自己表現力を身に付け自己有用感を持ちながら学習に取り組んでいる。

【今後の取組】

- ・事業所訪問やフォトロゲイニング等、地域との一層の連携を重視したキャリア教育の推進
- ・本事業で学んだ教育的手法や英語力向上の機運醸成を継続し、村高イヨボヤプランブラッシュアップとその取組の強化
- ・ICT機器を活用した主体的・対話的で深い学びの授業改善の研究
- ・カリキュラム・マネジメントを通じた校内組織の相互連携と活性化の促進



(様式1)

阿賀高 第 153 号

令和3年3月10日

高等学校教育課長 様

学番 31 県立阿賀野高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

阿賀野高等学校	
【テーマ】	「地域企業等と連携したキャリア教育の推進」
【目標】	<ol style="list-style-type: none">1 就職や進学への関心・意欲を高めるために、阿賀野市や地域の産業界、上級学校と連携しキャリア教育を拡充する。2 学習意欲の向上や進路意識の高揚を図るために新設した「学校設定科目」について、教育内容、評価等をより具現化する。3 「人間関係形成能力」を育むための学習プログラムの効果を検証し、より効果的な内容に発展させる。また、研修を計画的に実施し、教職員のスキルを高める。
【取組の概要】	<ol style="list-style-type: none">1 キャリア教育の拡充 地元企業の見学(2学年)：中止 地元企業理解のための講話(2学年) インターンシップ中止に伴う企画 3年生からの講話(1、2学年)2 教育活動の構築 キャリア教育に係る「学校設定科目」の内容について、より効果的な内容となるよう、検討を進める。3 「人間関係形成能力」を育むための学習プログラムの実践 大学と連携して、構成的グループエンカウンター(以下、SGE)、ソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)を実施して効果を検証し、主体的な進路選択ができるような取組につなげる。
【取組の成果】	<p>各事業実施後のアンケート調査で生徒8割以上の生徒が、理解が深まったと回答した。</p> <p>学校設定科目等の取組を、地域と連携しながら進めることで、1年生に進路意識を持たせることができた。</p> <p>SGEとSSTの取組を自分デザインの授業で活かすことで、生徒に主体的な進路選択をするための基盤を構築させることができた。</p>

【魅力と活力】実施報告_6_ (阿賀野高校)

【取組の内容】

(1) 地元企業理解のための講話 (2 学年) インターンシップ中止に伴う企画

今年度はインターンシップが中止となったため、生徒による成果発表会を行うことができなかったことから、地元企業の方を依頼し、インターンシップ事前指導の時に話していただく会社説明や社会人としての心がけ、1日の仕事の流れなどについて講演していただいた。

実施日 令和2年10月28日(水)7限 総合的な探究の時間
 講演者 丸三安田瓦工業(株) 代表取締役 遠藤 和人 氏
 (株)天朝閣グループ 代表取締役社長 古田 秀衛 氏
 村杉温泉 環翠楼 若旦那 荒木 風太 氏

(2) 3年生からの講話 (1, 2 学年)

実施日 令和2年12月16日(水)7限 総合的な探究の時間
 内容 就職先・進路先が決まった3年生5名が、進路決定までに自分で考えたことや、進路目標実現に向けた心構えなどについて1、2年生に講話を行った。

(3) 構成的グループエンカウンター (SGE)、ソーシャルスキルトレーニング (SST) の実施 (1 学年)

吉澤 克彦 氏 (新潟清心女子中学・高等学校特別顧問、元新潟大学教職員大学院教授) と連携して、「人間関係形成能力」を育むための教育プログラムを研究した。なお、今年度から始まった学校設定科目「自分デザイン」では、人間関係づくりや自己発見などの学びと地元産業に関する学びを結びつけて、自分の将来について考えるという授業を行っている。

実施日と内容

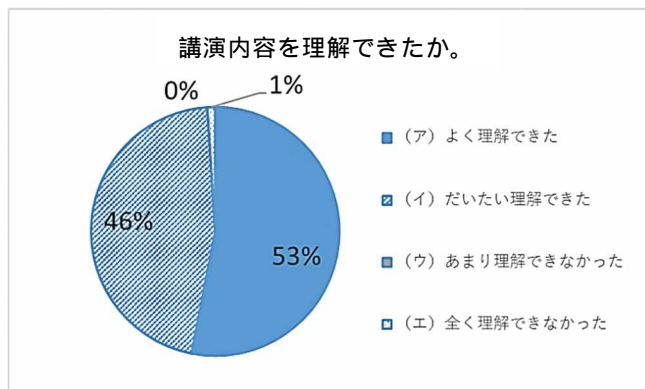
6月10日(水)6限 自己紹介、自分の好みをとおした人間関係づくり
 6月17日(水)6限 喜怒哀楽をとおした人間関係づくり
 8月26日(水)6限 喜怒哀楽をとおした人間関係づくり
 9月30日(水)6限 キャリア教育「どんな仕事合っているのか」
 10月14日(水)6限 自分に宛てて書く手紙
 12月9日(水)6限 私の強み発見

【取組の成果】

(1) 地域企業講演会 アンケート結果

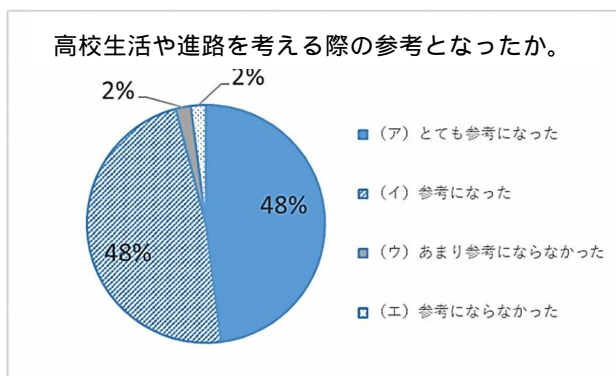
講演会の内容を理解することができましたか。

(ア) よく理解できた	52 人
(イ) だいたい理解できた	45 人
(ウ) あまり理解できなかった	0 人
(エ) 全く理解できなかった	1 人



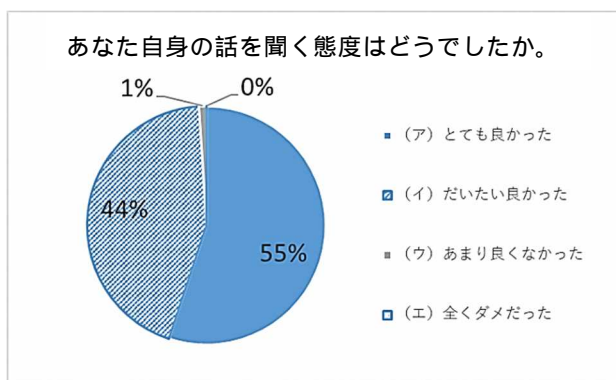
今後の高校生活や進路を考える際の参考になりましたか。

(ア) とても参考になった	47人
(イ) 参考になった	47人
(ウ) あまり参考にならなかった	2人
(エ) 全く参考にならなかった	2人



あなた自身の話を聞く態度はどうでしたか。

(ア) とても良かった	54人
(イ) だいたい良かった	43人
(ウ) あまり良くなかった	1人
(エ) 全くダメだった	0人



講演を聞いて学んだことは何ですか。(一部生徒の感想を抜粋)

- ・ 講演を聞いて、進路を考える参考となった。これを参考にして、将来、自分がどうなりたいかを考えてみようと思った。どの仕事に対しても、自分で考えて行動したりすることは大切だなと思った。(2年女子)
- ・ これからの学校生活をどのように過ごせば良いのかがよく分かった。(2年男子)
- ・ インターンシップが行うことができなかつた分、貴重なお話が聞けた。企業に求められるような人間、人から評価してもらえる人間になれるように、これから努力していきたいと思った。また、当たり前前はことは当たり前前にできるようにしたい。(2年女子)
- ・ ほとんどの会社の社長が求めている人は、今日言っていた話の人だとよく分かりました。あと、天朝閣さんが後悔していることは、英語を勉強しておけば良かったと言っていたので、なるべく生きていく中で大切な単語を覚えるようにしたいです。(2年男子)
- ・ どの会社でもお客様からの「ありがとう」の気持ちを大切にしていることが分かりました。自分も人から「ありがとう」と言ってもらえる人になりたいと思いました。(1年女子)
- ・ 自分の地元の好きなどころ、いいところが1つでも言えるようになりたいと思いました。責任感や積極性を高めて、当たり前前のことを当たり前前にできるようにしたいと思いました。「ありがとう」を言ってもらえるような人になりたいと思いました。(1年女子)
- ・ 何もせず批判ばかりする人、文句ばかり言う人はダメだと、担任の先生も全く同じことを言っていた。注意されても素直に聞く態度、失敗を恐れずに挑戦することが大事だと思いました。(1年女子)

(2) 3年生からの講話(1, 2学年)アンケート結果

「3年生からの講話はためになった」と回答した生徒 88.9%

生徒の主な感想

- ・ 進学、就職に関して、今からやっておいた方がいいことを聞くことができた。
- ・ 出席、言葉遣いなどに注意していきたい。自分の良さを伸ばしていきたい。
- ・ 志望動機に多くの人が苦戦したというのがわかった。答えられるような充実した高校生活を送りたい。
- ・ これだけは人に負けたくないということを見つけておくことが大事だとわかった。

(3) 構成的グループエンカウンター(SGE)、ソーシャルスキル・トレーニング(SST)の実施(1学年)について

自尊感情 尺度の平均ポイントが回を追う毎に上昇した。(50点満点中1学期 29.6 2学期 32.7 3学期 33.1) 人間関係構築や怒りのコントロール、進路意識の醸成などにより、自分を肯定的に捉えられるようになってきているといえる。

学校生活のアンケートでは「将来に希望を持っている」という項目で5点満点中3.1から3.3となっており、自己肯定感の上昇が見られる。

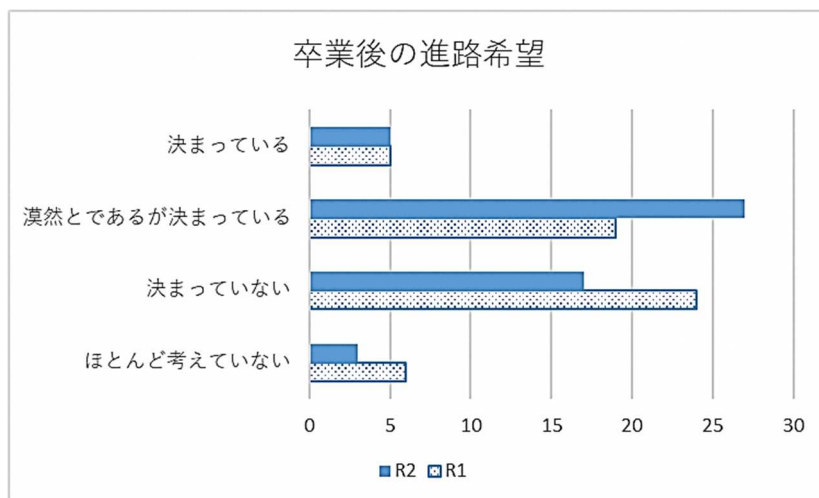
自尊感情尺度が低い生徒を早期発見し、支援をすることで、中途退学者の減少なども期待できる。

今年度から始まった学校設定科目「自分デザイン」では、地元産業の学習などに加え、これらの自己肯定感の向上を進路意識、進路目標につなげながら、自分の将来について考える内容を行っている。

「学校生活等に関する意識調査」の以下のデータから、昨年度に比べて進路に対する意識が高く、自分デザインなどの取組が順調であることがわかる。

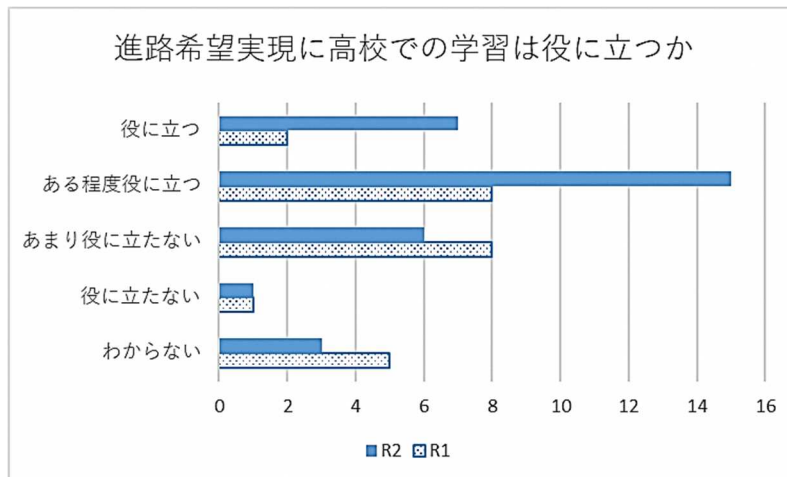
「自尊感情」... 自己に対して肯定的な評価を抱いている状態。

あなたの高校卒業後の進路希望は決まっていますか。



【魅力と活力】実施報告_6_ (阿賀野高校)

高校卒業後の進路希望の実現のために、現在の高校での学習内容は、直接役に立つと思いますか。(で1、2を回答した人のみ)



【総合所見】

3年間の取組をとおして、地域と連携した学校設定科目における指導や進路意識啓発の方法を具体化することができた。

今年度はインターンシップができなかったが、地域からの講演会の実施においては、地域の方から積極的な協力をいただいた。今後も様々な形の地域連携を考えていきたい。

アンケート結果からも今年度の様々な取組が進路意識の醸成に役立っていることがわかる。

【今後の取組】

これまでの取組を発展的に継続するとともに、地域人材による講演については、地域からの支援を得ながら進めていく。

S G E、S S Tでは、これまでの取組を参考にし、独自の教材、プログラムを構築する。生徒の進路実現に向けたサポート体制の構築を、進路指導部や学年と連携し、進めていく。



【地域企業講演会】



【3年生からの講話】



【S S Tの授業】

（様式1）

正徳高第192号

令和3年3月15日

高等学校教育課長 様

学番 39 県立正徳館高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

正徳館高等学校	
【テーマ】 小規模の普通科高校における教育機会の創生による教育の充実 ～地（地域）・学（学校）・官（官庁）連携による教育の質の向上～	
【目標】 1 学年 「よいた学」で、学校外の地域人材との交流を通して探究学習に取り組む際に必要な地域に対する理解や愛着を深めるとともに、協調性や主体性などを育成する。 2 学年 「長岡学」や「インターンシップ」で、地域が抱える諸課題に関わる概念を形成し、課題の解決に必要な情報を収集する能力、整理・分析する能力、表現する能力を養う。 3 学年 「長岡学」や「正徳館フェスティバル準備」で、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、地域社会の一員として主体的に探究活動に取り組む姿勢を養う。	
【取組の概要】 新型コロナウイルス感染症に伴う休校措置により中止となった取組を含む 1 学年 よいた学（フィールドワーク、地域の産業・歴史・文化の学習、よいた検定） 保育・福祉実習（中止） 地域の職業人取材 2 学年 長岡学（地域を主題とした課題解決型学習） インターンシップ キャリアプランニング（進路講話や新潟大学の学生による出前授業） 3 学年 長岡学（地域を主題とした課題解決型学習） 正徳館フェスティバル準備（学年縦断型グループの統轄、企画運営） ライフプランニング（卒業後の生き方について）	
【取組の成果】 学校設定教科「キャリアガイダンス」が令和元年度から全学年で実施され、3年間を通じた地域と協働した探究学習の体系化を進めることができた。特に、探究学習の学習過程について、社会科教育学の方法原理やシンキングツールを活用することで具体的な指導方法を試行し、次年度以降の探究学習の更なる体系化が可能となった。 アンケートでは、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、協調性、積極性などの能力が高まったと感じる生徒が多くいた。また、3学年の生徒に質問紙調査を行ったところ、今後の本校における探究学習のあり方について示唆が得られた。 また、探究学習や学校行事において地域連携を深めたことにより、授業をはじめとした様々な場面で、生徒と地域の人材が交流する機会が増加したに加え、学校行事をとおして地域連携を図る機運が生じ、小規模校における地域連携のモデルを構築することができた。	

1 取組の内容

令和2年度は、学校設定教科「キャリアガイダンス」の体系化を図るため、体験活動や交流活動を実施するなど地域連携の深化を目指していた。しかし、新型コロナウイルス感染症に伴う休校措置により、1学年の保育・福祉実習や2、3学年の長岡学など、計画の中止や変更を余儀なくされた。そこで、コロナ禍でも実践可能な取組に変更し、再現性の高い授業開発を行った。

また、社会に開かれた学校づくりを目指して、文化祭において「与板がっこうマルシェ」を昨年度に引き続いて開催し、学校行事を地域のイベントへと発展させる試みを実施した。

以下、学校設定教科「キャリアガイダンス」「総合的な探究(学習)の時間」における探究学習の取組および「与板がっこうマルシェ」における取組について記述する。

(1) 「キャリアガイダンス」「総合的な探究(学習)の時間」における探究学習の取組

1 学年

新型コロナウイルス感染症対策のため、「保育・福祉実習」は実施を見送ったが、その他の取組については感染症対策をとったうえで実施した。

ア 「よいた学」では、まち歩きや史跡巡りなどを行うことで学校所在地である与板地域に対する理解を深めた。また、与板町歴史ボランティアガイド会の主催する「よいた検定」を受検した。さらに、与板コミュニティセンターなどと連携して陶芸や聞香、日本茶教室を実施した。当初は地域住民も参加する予定であったが、感染症対策のため生徒のみで実施した。

イ 「地域の職業人取材」では、与板地域で働いている職業人に取材を行い、働いている様子を撮影し、その成果をクラス内で発表した。なお、撮影した写真は令和3年度にアイデム写真コンテスト「はたらくすがた」に出展する予定である。



よいた学でのまち歩き チャレンジゼミ(日本茶教室) 地域の職業人取材(打ち刃物)

2 学年

「長岡学」を「キャリアガイダンス」で実施し、社会科教育学の方法原理やシンキングツールを活用して学習活動の体系化を目指した。インターンシップは感染症対策をとり実施した。

ア 「長岡学」では、グループに分かれて探究学習を実施した。1学期は、探究するテーマの設定と「課題の設定」に取り組んだ。はじめに、新聞記事の読解や家族への聞き取りを行い、興味・関心のあるテーマを設定させた。テーマ設定後は資料読解と外部講師への聞き取り(webexを活用)を行い、内容をデータチャートにまとめた上で課題(仮説)の設定をした。

2学期以降は、「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を実施した。これまで「情報の収集」では、生徒に資料検索をさせても適切な資料を見つからず、学習が進まない状況がみられた。今年度は資料読解と「整理・分析」での能力の伸長を図るため、教員が資料を準備した。「整理・分析」では、資料読解した内容をデータチャートにまとめて情報共有を図り、コンセプトマップを作成させ、学習内容を関連付けて情報の概念化を促した。「まとめ・表現」として文化祭で中間報告会を実施した。中間報告会後は、それまでの学習を踏ま

【魅力と活力】実施報告_7_ (正徳館高校)

えて「課題の設定」を行い、前述と同じ過程で学習を進め1月末に最終報告会を実施した。
イ 「キャリアプランニング学習」では、新潟大学創生学部学生による出前授業を実施する予定であったが中止となり、代替として、新潟大学人文学部の学生と Zoom で接続し、探究学習における「まとめ・表現」の方法に関する遠隔授業を実施した。プレゼンテーションの作法について学ぶとともに、大学生と交流により進路意識を醸成する機会となった。



オンラインでの聞き取り



コンセプトマップの作成



文化祭での販売体験

3 学年

「長岡学」では、前年度の探究学習で取り組んだことを踏まえて具体的な活動に挑戦させる予定であったが、感染症対策に伴う休校により実施を見送った。代替として、「現代社会」「総合的な探究の時間」「キャリアガイダンス」を教科横断的に連携させ、「社会参画を志向する社会科授業」の方法論に基づいた単元開発を行い、社会参画型学習を実施した。

ア 「ライフプランニング」では、進路決定前の1学期中に就職試験や進学試験に向けた面接指導や論文・作文の指導を実施した。進路決定後の1月中旬以降は、準教科書を活用した授業や外部講師を招いた講演会を開催し、卒業後の生活設計について考察させる機会とした。

イ 「正徳館フェスティバル準備」では、前年度の来場者のアンケート結果から文化祭の改善点を「課題の設定」として挙げさせ、それに基づいて文化祭の準備を計画・実行させた。

ウ 「長岡学」では、教科横断的に連携させた社会参画型探究学習を実施した。食品ロスとその対策としての公共政策について学習し、与板地域の農家や飲食店、小売店、子ども食堂、フードバンクの経営者や運営者への聞き取りを通して望ましい公共政策を意思決定させた。その後、生徒の意思決定の結果を長岡市議会議員に発表し、講評していただいた。



3 年生による社会参画型の探究学習の様子

(2) 「与板がっこうマルシェ」における取組

昨年度に引き続き、文化祭において「与板がっこうマルシェ」を開催し、生徒玄関前と体育館のスペースに合計 16 の店舗・団体に出店していただいた。感染症対策のため、来場者の受付などで後援会・同窓会をはじめとした地域住民の方に協力を得て開催することができた。

また、MUSIC DROP 代表平田英治様の協力を得て、ライブを開催するなど新しい試みにも挑戦した。



生徒玄関前のキッチンカー出店の様子

2 取組の成果

(1) 目標の達成状況

本事業における令和2年度の自己評価計画（数値目標）と結果は下表のとおりである。就職内定率の目標は達成した一方で、一般選抜志願倍率、中途退学者、「高校生活」満足度、「入りたい学校」については目標の数値に到達できなかった。

自己評価計画	目標値	結果
一般選抜志願倍率	1.00倍	0.70倍
中途退学者	0.00%	2.78%
就職内定率	100%	100%
「学校生活に関する意識調査」における「高校生活」満足度	90%	1学年 57.9% 2学年 38.0%
「学校生活に関する意識調査」における「入りたい学校」	70%	1学年 15.8% 2学年 14.3%

(2) 探究学習に関するアンケート結果

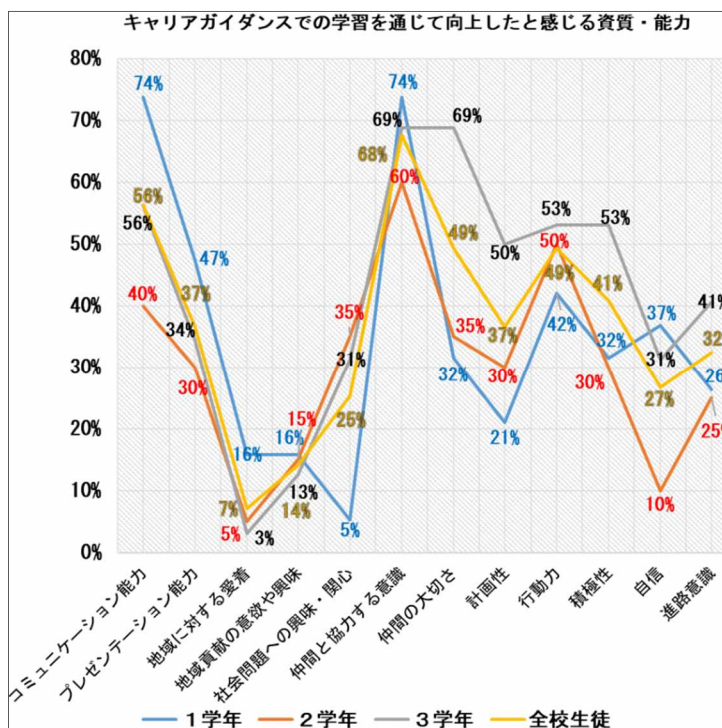
「キャリアガイダンス」での学習を通じて向上したと感じる資質・能力

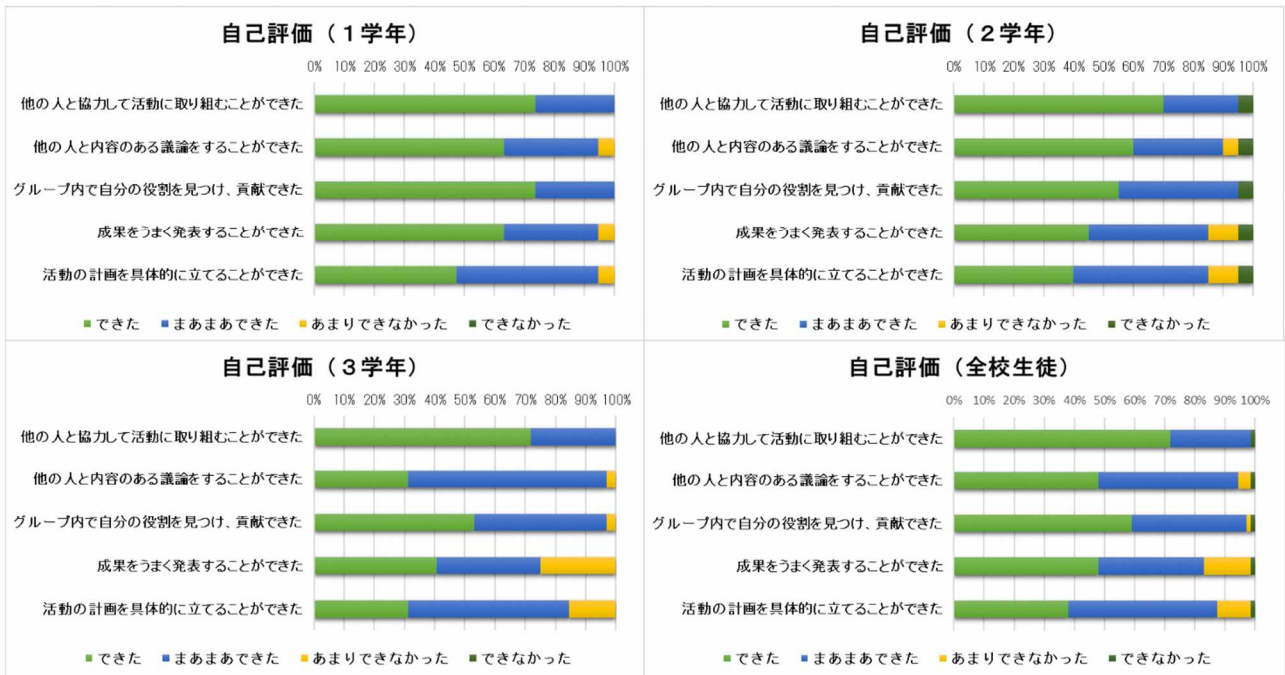
生徒が向上したと感じる資質・能力は右のグラフの通りである。「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「仲間と協力する意識」「行動力」が向上したと回答する生徒が多くいた。特に、3年生は「仲間の大切さ」や「計画性」「行動力」「積極性」「進路意識」が高まったと答えており、3年間「キャリアガイダンス」を通じた探究学習の成果が表れている。

なお、「社会問題への興味・関心」については、1年生のみ低い数値となった。「よいた学」では、与板地域について学習することが中心となっており、社会課題を認識させる機会が少なかったことが考えられる。

自己評価

生徒の自己評価は次のグラフのとおりである。グループ内での協働学習については、「できた」「まあできた」と感じる生徒が多くおり、主体的・対話的に学習活動に臨むことができていたと言える。また、3年生は「正徳館フェスティバル準備」で自由度の高い活動や、社会参画型の探究学習といった難易度が高い学習活動の取組から、成果発表や活動の計画性に課題意識を持つ生徒がいたことが考えられる。





生徒の主な感想

キャリアガイダンスでグループの人と協力できました。仲間と協力することで自分のわからないことが分かったり、自分が分かっていることを仲間に教えてあげたりということができるようになりました。今後の学校生活でも、仲間と協力するということや、コミュニケーション能力をつけていこうと思います。

この時間を通してクラスの友達とのコミュニケーションが一段と深まった感じがしています。気軽に話しかけられるようになってきているだけでもかもしれませんが、今は自分から話すことができ成長を感じています。

3年生対象の質問紙調査

3年生は、2年時に生徒自身でテーマ設定および課題の設定を行う探究学習に取り組んだうえで、今年度、食品ロスをテーマ設定し、社会参画型の探究学習に取り組んだ。学習指導要領の解説では、生徒が自ら「課題の設定」を行うことを理想としているが、生徒が自由にテーマや課題に設定を行うと、体系化が難しく教員の大きな負担となっていた。そこで、自由テーマの探究学習とテーマが設定された探究学習をともに経験した3年生の生徒に質問紙調査を実施し、調査結果の中で注目すべき点を挙げる。

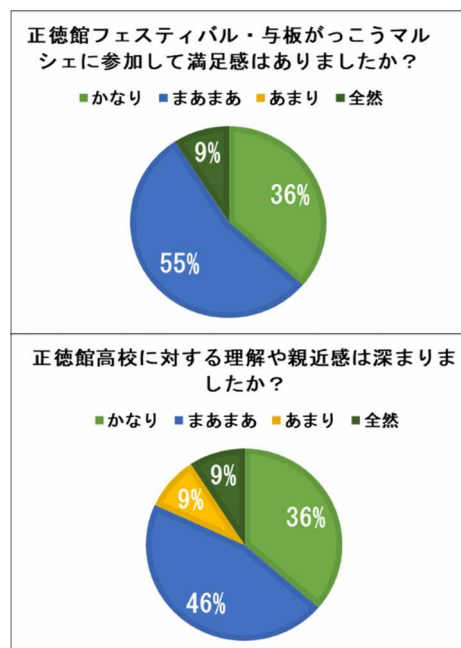
「自分たちで決めたテーマの方が主体的・積極的に取り組むことができると思う」という質問項目に対し、「その通りだ」「まあそうだ」と肯定的に捉えた生徒は12.5%にとどまり、「どちらともいえない」が25%、「あまりそう思わない」「思わない」が62.5%であった。生徒の意見欄を見ると、「自分たちで1から道を決めると、なかなか決まらないので正直時間がもったいないと感じていました。」や「自分だけでテーマを決めるには時間がかかったし、グループ内でテーマに対する解釈が違ったりするのでずれが生じる。」といった意見が見られた。また、「自分たちで決めたテーマの方が参考になるし、知識が身につくと思う」という質問項目に対し、「その通りだ」「まあそうだ」という生徒は34.3%と上記の質問項目と同様に少数にとどまった。

このことから、生徒の主体性の有無や知識・技能の向上の程度と、探究学習のテーマ設定が自由であるかどうかは関連が薄いということであり、主体的・対話的・協働的な学習活動を充実させるには、教員側がテーマ設定をした方が望ましいと感じる生徒が多くいるということがわかった。この調査の結果は、次年度以降の年間指導計画に反映させる予定である。

(3) 「与板がっこうマルシェ」について

「与板がっこうマルシェ」の来場者に、Google formでアンケートを実施した。結果は右のグラフのとおりである。約9割の来場者が文化祭と「与板がっこうマルシェ」に参加して満足感が得られたと回答し、正徳館高校に対する理解や親近感が高まったと回答する来場者も約8割いた。また、出店者にもアンケートを実施し、回答した全ての出店者から出店による収益性と満足度が高いとの回答が得られた。

なお、「与板がっこうマルシェ」を契機として、本校を会場に与板地域の行事を実施する相談を与板コミュニティセンターなどと進めており、県立学校と地域との連携の新たな形を模索し始めている。



3 総合所見

本事業において、地域と連携した探究学習に取り組んだ成果として、前述のとおりコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力をはじめ、協働する際に必要となる行動力や積極性、計画性が成長したことがあげられる。

これは、学校設定教科「キャリアガイダンス」の時間に体系的に協働学習に取り組んだことが要因としてあげられる。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究学習の過程における具体的な実施内容や方法論を構築したことで、生徒自身も学習内容を把握しやすくなり、教員側も妥当性のある指導及び評価が可能となった。これにより、年間指導計画の作成において、「探究学習で何を生徒に学習させるか」という視点から、「探究学習を通して生徒の資質・能力をどう伸ばさせるか」という視点への転換を図ることができた。

また、地域との連携も深化した。地域の方から探究学習の内容について意見や提案を受けるとや、これまでよりも明確な目的を持って協力の依頼をする場面が増えた。本事業の指定を受けてからの3年間で、地域との協働による探究学習の体系化が進むとともに地域に浸透してきたことで、次年度以降にさらに発展・深化した取組が可能となった。

一方、今後の課題もある。外部講師に係る経費については、無償での協力をいただくことが多かったが、地域住民に負担感を与えないような対策を検討する必要がある。また、インターネットの活用について、今年度は講師に来校していただく代替としてzoomなどで接続して授業を実施したが、授業中に接続が切断してしまうことがあり、予定通りの学習活動ができないことがあった。今後は、整備された学校独自学習専用回線を活用し、学習活動の充実を図っていきたい。

4 今後の取組

本校における探究学習の枠組みは概ね完成し、再現性のある取組に体系化できた。今後は方法論にこだわり、「何を学習させるか」ではなく「どう学習させるか」を模索していく。

令和4年度に新学習指導要領が施行される。中央教育審議会の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(2021)には、2020年代に実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「協働的な学び」が示されている。令和4年度以降の本校の新カリキュラムをとおして「協働的な学び」を実現させるべく、地域連携の深化と探究学習や体験的活動の充実を図っていききたい。

(様式 1)

栃 高 第 193 号

令和 3 年 3 月 10 日

高等学校教育課長 様

学番 40 県立栃尾高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

栃尾高等学校			
<p>【テーマ】 栃尾地域とともに進める、魅力と活力あふれる学校づくり ～地域に根ざした、特色あるキャリア教育・教育課程の開発～</p>			
<p>【目 標】</p> <p>1 学校と地域の協働体制を築き、総合学科の特性をさらに発揮した多様な教育活動を展開することで、生徒にも地域にも魅力ある学校づくりを進める。</p> <p>2 地域の関係施設・機関との交流活動や共同授業、地域学習等を取り入れた特色あるキャリア教育や教育課程を開発、実践することで、生徒が問題の解決に主体的に取り組む態度や能力を養い、社会性や人間性を、高めるとともに学校が地域社会に活力を与え、地域から求められる存在となることを目指す。</p>			
<p>【取組の概要】</p> <p>地域学習や地域の関係機関（大学、企業、福祉施設、幼・保、小・中学校、行政、住民等）との交流や実習・共同授業等に取り組み、総合学科4系列（人文・自然科学、福祉・家庭、工業技術、ビジネス・情報）各々の学習の深化や、相互の横断化・総合科を図る。</p> <p>1 大学との連携・共同授業による地域活性化プロジェクトの取り組み ・長岡大学と栃尾地域の活性化や地域貢献をテーマにした様々なプロジェクトの立ち上げ</p> <p>2 地域を学ぶ体験活動の実施、地域への学習成果発表会等の企画・運営 ・近隣地域の伝統文化、産業、歴史等を学ぶ様々な体験的活動 ・栃尾文化センターと合同で「来て！見て！作って！体験フェスティバル（地域の児童生徒対象イベント）」や「栃尾高校展（学習成果発表会）」等の地域貢献事業を企画、運営</p>			
<p>【取組の成果】（評価の詳細については、別紙参照）</p>			
評価項目	実際の取組例	評価方法	評価
1 生徒の郷土愛を醸成し、地域から求められる存在へ	(1)地域探訪の実施	・生徒・職員の感想 ・地域の方からの感想	3
	(2)栃尾高校展の実施		3
	(3)地域イベントの実施		2
2 魅力あるキャリア教育・独自の教育課程の開発	(4)地元企業等との協働	・生徒・職員の感想 ・地域の方からの感想	3
	(5)長岡大学との共同授業		2
	(6)とちおてまり講習会		2
<p>「評価」 3：達成できた 2：概ね達成できた 1：達成できなかった</p>			

【魅力と活力】実施報告_8_ (栃尾高校)

利用者の増加や栃尾地域の魅力を広く伝えることができる。

取組の概要

ア 実施日時・場所

日時 令和2年12月12日(土)～12月21日(月)9:00～17:00

場所 栃尾文化センター 1階展示室

イ 内 容

感染症対策として例年実施しているオープニングセレモニーは中止とし、展示のみを実施した。大雪期間中の開催となったが、来場者はのべ約1,400人となり盛況であった。

展示内容は、地域探訪での学習内容をはじめとし、4系列協同の取り組みとして、フェイスシールドやながおか花火館向けの商品開発、エコバックの製作、フォトコンテストなどである。また、各系列・部活動等で地域に関する取り組みも展示し、大勢の来場者の方に栃尾高校の魅力を発信することができた。



取組の成果

コロナ禍だからこそできた、今年度の取組を十分に展示できた。その結果、多くの方々に来場していただき、以下に記述する感想を頂いた。感想の多くは展示内容について大変良いというものであり、地域の方にも好評であったことがうかがえる。

(来場者感想：抜粋)

- ・取組内容が多岐にわたっており、いずれも素晴らしい作品ばかりで感心した。
- ・地域との繋がりがよく分かる展示で大変良かった。
- ・ぜひフェイスシールドの販売をしてほしい。

(3) 来て！見て！作って！体験フェスティバルの実施(中止)

目的

高校での活動で得た知識や技術を活かし、地域の子どもたちに夏休みの自由研究のヒントを提案する。さらにイベントを通して栃尾や栃尾高校の魅力を伝える。

取組の概要

ア 実施日時

令和2年8月7日(金) 13:00～16:00

イ 内 容

新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策を講じながら、開催に向け生徒・職員一同準備を進めたが、来場者の安全を第一に今年度はやむなく中止とした。学校や長岡市のホームページに掲載したが、当日製作予定であったキットを来て頂いたお客様に配付した。100名ほどのお客様に来て頂き、70セットの製作キットを配付した。



【魅力と活力】実施報告_8_（栃尾高校）

取組の成果（来場者感想：抜粋）

中止となり、当日のイベントは開催できなかったが、それでも心待ちにしていた子ども達や地域の方々には来場して頂き、「来年の開催を切望しています」との言葉を頂いた。改めて本イベントが地域に根付いた欠かせないものであることを実感した。

(4) 地元企業等との協働

取組の目的

学習活動を活かし地元企業と商品開発に取り組むことにより、地域の活性化につなげる。

取組の概要

ア 令和2年5月～7月 フェイスシールドの製作

栃尾青年会議所様と協働し、新型コロナウイルス感染症予防のためのフェイスシールドの製作を行い、栃尾社会福祉協議会を通じて地域の福祉介護施設に120セット寄贈した。本校においては4系列（工業技術系列、福祉・家庭系列、ビジネス・情報系列、人文自然科学系列）が協働し、それぞれの系列の強みを活かした製作活動を実践した。



イ 令和2年9月 ながおか花火館限定商品の開発

地元企業であるおさべ菓子店様と共同で開発し、9月18日（金）オープンのがおか花火館にて50セット限定で販売した。おさべ菓子店様特製の「まどれーぬ」や粉菓子を栃高未来プロジェクト特製の風呂敷（布地製造は地元企業である山信織物様）で包み、キーホルダを付けた。4系列の強みを活かし、風呂敷やキーホルダのデザインさらに販売促進用のしおりやPOPに至るまで、授業の中で生徒が普段学んでいることを活用し、製作に取り組んだ。



取組の成果

いずれの商品も大好評であった。フェイスシールドの販売は行っていないが、ぜひ販売してほしいとの意見を地域内外から頂いている。花火館限定商品も即日完売で、栃尾地域の魅力を広く発信することができた。

(5) 長岡大学との共同授業

取組の目的

長岡大学と連携し、地元企業や行政機関等の協力を得ながら、栃尾地域の交流人口の増加を目指したプログラム開発をおこなう。

取組の概要

ア 取組期間

令和元年度から開始。現在まで継続中。

イ 内 容

「地域資源（食品）を活用した商品開発」プログラムの開発。

当初計画を進めていたおさべ菓子店様との食品を開発する企画は、状況を踏まえ本校だけでの取組に変更して実施した。（長岡大学はマスクの製造に変更）

「地域の観光資源を活用したツアー開発」プログラムの開発。

【魅力と活力】実施報告_8_（栃尾高校）

当初計画をすすめていたツアー企画は、フォトコンテストに変更して実施した。

取組の成果

昨年度に引き続き、商品開発とツアー開発を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、取組を見直す必要があり、大学生との話し合いは、ほぼリモートでの実施となった。

現状において、どのようにすれば協働で学習できるか、また企業および行政との連携ができるかを検討する機会となった。来年度も長岡大学と共同授業を行う予定であるが、今年度中に完成できなかった「地域活性化プログラム」の開発に向けて継続して進めていきたい。



(6) とちおてまり講習会

取組の目的

地域の方を講師として迎え、伝統文化を学び継承する。

取組の概要

ア 実施日時

令和2年10月14日（水）3・4限

イ 内容

「栃尾手まりの会」様を講師に迎え、「ファッション造形基礎」の選択生徒による栃尾手まりの制作を実施した。

取組の成果

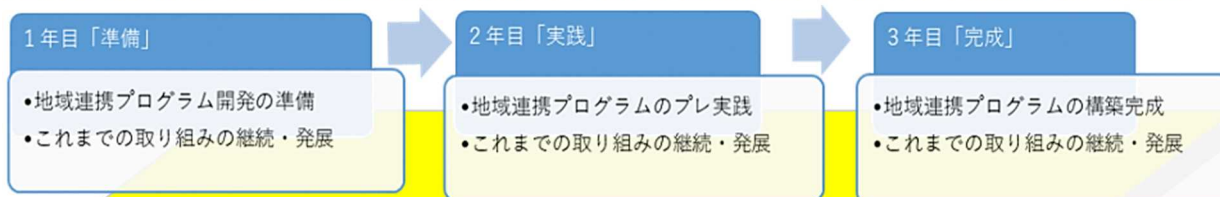
「てまり」が、栃尾の伝統工芸品であることを知りつつも、制作は初めての生徒ばかりで最初は糸のさし方に四苦八苦していたが、無事に菊の花の手まりを完成させることができた。「疲れたけれどかわいい作品ができてよかった。」「楽しかった。」と、達成感や満足感を感じることでできた取組であった。



2 総合所見 ～3年間を振り返って～

本校は平成27年度から3年間「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト事業」の単独実施校として地域連携に取り組んできた。また、平成30年度からは「明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業」「魅力と活力ある学校づくり推進事業」の研究指定校として、これまでに培った地域とのつながりを大切にしながら、地域資源や人材を活用するプログラムを教育活動として構築することを目標に活動してきた。3年間の取組の各段階を表すと次のとおりとなる。

○魅力と活力ある（旧：明日の新潟の飛躍につながる魅力ある）学校づくり推進事業の各段階



オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト事業

で培った【地域とのつながり】を基盤として

最終年度である今年度は、これまでの様々な取組を総括し、一つの特色ある地域連携プログラムとして完成することを当初は目標としていた。令和4年度から実施される新学習指導要領を視野に入れ、本校の新しい教育課程の中で、その地域連携プログラムが恒常的に機能するようなものになりたい、と考えてのことである。各系列内で留まっていた地域連携の取り組みが、学校全体のものとなるよう、4系列の総合化を図る計画を進めていた。例えば、昨年度実施した長岡大学とビジネス情報系列との共同授業を、福祉・家庭系列や工業技術系列にも拡大しようと、長岡大学と話し合いをしていた。しかし、予測もしなかった新型コロナウイルスの感染症の拡大のため、計画を実行できないばかりか、通常授業ですらままならない日々を過ごすことになった。

しばらくして、臨時休業が開け授業を再開する頃、思いがけなく地域の方から「福祉施設に寄贈するフェイスシールドを制作してほしい」という依頼をいただいた。聞けば、これまで本校が実施していた「来て！見て！作って！体験フェスティバル」において、本校が3Dプリンターを使った授業を行っていることを思い出し、声をかけて下さったということであった。振り返ってみると、これまで実践してきたどの取組も、はじめは本校の活動に興味を持ってくださった地域の方々の助言からスタートしたものであった。本校の教育活動にとって、地域とのつながりがいかに大切かを再認識することとなった。

「フェイスシールド制作」を4系列の取組としてスタートさせたことを皮切りに、私たちが今できることは何かを常に考えながら、校内4系列でタッグを組み、「栃尾エコバッグ制作」「花火館限定商品開発」「栃尾フォトコンテスト」と結果として、他にはないユニークな活動を実践することができた。ただし、概ね放課後を利用して生徒ボランティアで取り組んだ活動であって、授業の中にしっかりと取り込めた活動は多くはなかった。したがって、今年度の「地域連携プログラム構築」という目標を達成するまでには至らなかったと考えている。

しかしながら、このプロジェクト全体の目標である、「学校と地域の協働体制を築き、総合学科の特性をさらに発揮した多様な教育活動を展開することで、生徒にも地域にも魅力ある学校づくりを進める」「地域の関係施設・機関との交流活動や共同授業、地域学習等を取り入れた特色あるキャリア教育や教育課程を開発、実践することで、生徒が問題の解決に主体的に取り組む態度や能力を養い、社会性や人間性を、高めるとともに学校が地域社会に活力を与え、地域から求められる存在となることを目指す」というゴールに向かっては、間違いなく進歩し続けている。特に今年度の4系列の総合化による目標達成という方向性は間違いなく、地域に根ざしたキャリア教育を実践し、「地域連携プログラムを開発」した上で教育課程の中にきちんと位置づけられるよう、次年度以降も研究実践に取り組んで行きたいと考えている。

（様式1）

吉高 第180号

令和3年3月16日

高等学校教育課長 様

学番 46 県立吉田高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

吉田高等学校	
【テーマ】	地域で貢献できる人材の育成
【目標】	<ol style="list-style-type: none">1 地域に根ざした体験や学びを通して自尊感情を高め、能動的に学び続ける力を育成する。2 人と協働する中で自分の役割を見つけ、自ら考えて行動することができる力を育成する。3 吉田高校の教育活動を活性化させ、その内容を地域に情報発信する。
【取組の概要】	<p>○ 燕市教育委員会、燕商工会議所、吉田商工会をはじめとする吉田高校サポート協議会、燕市観光協会、社会福祉協議会等との連携により事業を行った。主な取組は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none">・地域進路探究講演会（2年生対象）・ビジネスマナー講習会（情報ビジネスコース3年生対象）・ビジネスマナー講習会・実習前の指導（「地域ビジネス実習」の2年生履修者対象）・「地域ビジネス実習」でのインターンシップ（9～11月実施）・地元企業経営者による模擬面接（3年生就職希望者）・巢立ち教室（3年生対象）・グローバル教育体験講座（文理コース3年生）・赤ちゃん交流会、手話体験講座、地域の食と文化を学ぶ講座（人間総合コース2年生・文化教養コース3年生）・地域スポーツ体験（人間総合コース健康専攻2年生・健康体育コース3年生対象）
【取組の成果】	<ol style="list-style-type: none">1 吉田高校サポート協議会との連携が3年目に入り、講演会講師や就職希望3年生を対象とした模擬面接の教育活動が充実したものとなった。商業の学校設定科目「地域ビジネス実習」が2年生で新規スタートし、講習会やインターンシップでの授業効果が上がった。2 本事業の生徒の満足度の平均値が、前年度と同じ3.7と高かった。3 本事業3年間の実績により、地域との連携が深まり、特色ある学校づくりを進めることができた。

1 取組の内容と成果

主な取組の内容とともに、アンケート結果の評価「4：とてもよい 3：まあまあよい 2：あまりよくない 1：全くよくない」を付する。満足度はアンケート2つ目の質問項目の平均値とする。

(1) 地域進路探究講演会 【2年生：112人】

期 日 令和2年6月17日(水)

目 的 地域の課題と必要な力について、実際に企業で働く方から学ぶ。

内 容 地元企業の取組、仕事の内容と商品、働くことの意義、地域における課題など講話をとおして学んだ。

講 師 (株)阿部工業 代表取締役社長 阿部 貴之 氏

(有)長谷川挽物製作所 代表取締役社長 長谷川 克典 氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
講話の内容に興味をもちましたか	50%	37%	13%	0%
講話は満足できるものでしたか	55%	42%	3%	0%
講師の方の話で気付くことができましたか	55%	34%	11%	0%
地域の企業について興味・関心が高まりましたか	53%	37%	10%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	53%	42%	5%	0%

生徒の感想

満足度 3.5

「燕市の企業の素晴らしさがわかった。」

「社会人として生きるということの意味や、大きなことを成し遂げるには、小さな積み重ねが大切だと分かった。」

「進路を考える情報としてとても参考になった。」



(2) ビジネスマナー講習会 【情報ビジネスコース3年生：20人】

期 日 令和2年7月15日(水) 13:15~15:05

目 的 基本的なビジネスマナーを学び、働く上での心構えや人と協調していくために必要な能力を身に付ける。

内 容 チームとして働くこと、挨拶、言葉づかい、相手への配慮をゲームや実技をとおして学んだ。

講 師 特別養護老人ホーム白ふじの里 園長 佐野 一美 氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
ビジネスマナーを学ぶことに興味はありましたか	33%	67%	0%	0%
ビジネスマナー講習会は満足できるものでしたか	44%	56%	0%	0%
講習会でのゲームは楽しく参加できましたか	72%	28%	0%	0%
社会人になることへの心構えや関心は高まりましたか	44%	56%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	61%	39%	0%	0%

生徒の感想

満足度 3.4

「フラフープの輪くくりや伝言のゲームが楽しかったです。」

「メモをすることで、報告や連絡が間違いなく伝えることができるということが、体験をとおして分かった。」

「ホウ・レン・ソウ(報告・連絡・相談)が大切であることやチームとして働くことの意義を理解することができた。」



【魅力と活力】実施報告_9_ (吉田高校)

(3) 「地域ビジネス実習」でのインターンシップ 【2年生：10人】

期 日 令和2年9月15日(火)～11月17日(火)の13:15～15:05 7日間
 目 的 地元企業等で現場実習し、勤労観、職業観を養うとともに、地元企業の特徴を知り、互いに報告し合い情報を共有するとともに、将来の進路を考えるきっかけとする。
 内 容 2学期、企業に毎週の授業2時間×7回、継続的にインターンシップを経験した。
 事業所 (株)ほしゆう エコ金属(株) 桜井の里福祉会
 新潟ダイヤモンド電子(株) (株)サマンサハート

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
企業実習をすることに興味はありましたか	30%	60%	10%	0%
企業実習は満足できるものでしたか	30%	70%	0%	0%
企業実習は積極的に参加できましたか	50%	40%	10%	0%
社会人になることへの心構えや関心が高まりましたか	30%	70%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	20%	60%	20%	0%

生徒の感想

満足度 3.3

「見学先の仕事内容を知ることのほか、働くときのやりがいや心構えについて話を聞くことができたよかった。」
 「最初は積極的に動くことができなかったが、慣れるにつれ作業の流れがわかってきた。」
 「工場に入ったら機械の音が大きかった。手作業のほか機械の操作もさせてもらった。」



(4) 地域スポーツ体験講座 【人間総合コース健康専攻2年生、健康体育コース3年生：13人】

期 日 令和2年9月9日(水)
 目 的 体操の日本代表経験者による実技指導をとおして、マット運動の基本技術等やスポーツをとおした生き方を学ぶ。
 内 容 倒立、前転、後転、側転、バック転、ハンドスプリング
 講 師 新潟経営大学 経営情報学部 助教 森 昶人氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
この取組について話を聞いたとき興味を持ちましたか	77%	8%	15%	0%
講師からの実技指導は満足できるものでしたか	77%	15%	8%	0%
マット運動の基本技術が向上しましたか	77%	8%	8%	7%
体操についての興味・関心は高まりましたか	54%	39%	7%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	31%	15%	46%	8%

生徒の感想

満足度 3.7

「有名な森先生に教えていただき、ハンドスプリングが前よりできるようになった。」
 「森先生の動きは、きれいでカッコよかった。ハンドスプリングも補助していただいた。」
 「ゆっくり回るところ、足を伸ばすところ、早く回るところなど、ひとつの技に気を付ける

ポイントがたくさんあることがわかったので、もっと練習して頑張りたい。」

(5) 地元企業経営者による模擬面接 【3年生：48人】

期 日 令和2年9月23日(水)、9月28日(月)、9月30日(水)

10月2日(金)、10月5日(月)の5日間

目 的 就職を目指す3年生48名が、模擬面接により受け答えの内容や伝え方について指導を受け、より良いスキルを習得する。

内 容 企業経営者と教員がペアで面接官役となり就職希望者の模擬面接を行う。生徒1人が2回、面接官を変えて模擬面接を受ける。足りない点を知りさらに練習を積む。

地元協力企業等

吉田商工会、分水商工会

社会福祉法人つばめ福祉会

社会福祉法人吉田福祉会

社会福祉法人桜井の里福祉会、

(株)ほしゆう、燕運送(株)、藤田金属(株)

(株)サマンサハート、明道メタル(株)、(株)山本鉄工所、(株)ツバメックス

以上、吉田高校サポート協議会から12団体延べ12人参加



成 果

一次応募での就職内定率 81.8% (昨年 80.0%)

全員が内定した時期 2月末 (昨年 12月半ば)

就職内定した地域 三条・燕地区での就職内定者 80.9% (昨年 88.0%)

(6) グローバル教育体験講座 令和2年12月8日(火)

目 的 国際的な立場で活動している方を講師に、世界との関わりや日本の良さ、発展途上国への協力、児童労働等について学習する。

内 容 グローバル時代における世界との関わりについて

講 師 長岡市国際交流センター「地球広場」センター長 羽賀 友信 氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
この取組について聞いたとき、興味を持ちましたか。	71%	26%	0%	3%
グローバル時代における世界との関わりについて考えられたか。	83%	11%	6%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	83%	11%	6%	0%

生徒の感想

満足度 3.8

「自分が恵まれた環境で生きているのだなと改めて思った。何かに一生懸命になりたい。」

「世界中を何か国も行っている方から話を聞くことができ刺激になった。漠然とした夢を具体的にするために、挑戦していきたい。」

「日本だけを見るのではなく世界を見つめること、将来のこと、生き方、価値観を教わった。」

「客観的に自分を見て行動し、社会に貢献できる人材を目指したい。」



(7) 手話体験講座 【文化教養コース3年生：29人】

期 日 令和2年11月18日(水)午前と午後の2回

目 的 手話に興味・関心をもち、主体的に学習するとともに、聴覚障がい者を理解する。

内 容 身近な手話、手話での自己紹介

講 師 吉田手話サークルふれあい 鈴木 明 氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
手話講座を聞いたとき興味をもちましたか	67%	32%	1%	0%
障がいへの理解は深まりましたか	92%	8%	0%	0%
手話について興味・関心が高まりましたか	84%	12%	4%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	79%	17%	4%	0%

生徒の感想

満足度 3.9

「手話の動きが少し違うだけで、意味が異なることがわかった。」

「手話を学び、相手に伝える喜びを知りもっと勉強したくなった。」

「基本的な手話を使い、簡単な挨拶や名前は手話で伝えられるようにしたいと思った。」

「将来、接客業に進むので、手話を覚えて仕事の幅を広げたい。」



(8) 巣立ち教室 【3年生全員：97人】

期 日 令和3年1月21日(木)

目 的 卒業後、人としての生き方や心構えについて講演をとおして学ぶ。

内 容 「朝起き」「挨拶」「気づいたらすぐ」「約束を守る」「さっさと片付け」「難しいほうから」の6つのキーワードを基に話があった。

講 師 (株)ほしゆう 代表取締役社長 星野 光治 氏

アンケート結果	評価4	評価3	評価2	評価1
講演会について興味がありましたか	50%	41%	8%	1%
内容は満足できるものでしたか	54%	36%	8%	2%
講話から高校生と社会人との違いが理解できましたか	60%	32%	8%	0%
高校卒業するうえでの心構えができましたか	54%	36%	8%	2%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	60%	30%	8%	2%

生徒の感想

満足度 3.5

「健康、家庭円満、経済的余裕が幸せには必要であるとの話があった。真の幸せをつかみたいと思った。」

「社会に貢献をし、役に立つ人になるとともに、いい家庭をつかって生きていきたいと思った。」

「人間関係を大事にしたいと思う。幸せについて考えることができてよかった。」

2 総合所見

3年間本事業に取り組み、地域と連携した教育活動が授業や特別活動で展開された。平成30年度に立ち上がった「吉田高校サポート協議会」により、地域のマンパワーを得られたことも、本事業を進める上で大きな力となった。

県指定1年目となる平成30年度は、地域からの協力を得て、3年生就職希望者に対象の地元企業経営者による模擬面接を新しく取り入れ、これまで本校が実施してきた地場産業学習会や地域の食と文化を学ぶ講座、グローバル教育、地域スポーツ講話などを実施し、生徒に体験や刺激のある講話を聞くことができた。本事業の生徒の満足度は、3.5であった。平成31年度入学生の教育課程から、5つあったコースを3コースに整理・統合した。本事業を活用し、先進校視察を実施したことにより、新たな学校設定科目の立ち上げに向けて取り組んだ。

2年目の令和元年度は、地域の方と教職員とが、顔なじみとなったことから連絡や調整もしやすくなった。特に、ビジネスマナー講習会や3年就職希望者の模擬面接では、「吉田高校サポート協議会」との連携により、協力体制が進み、教職員とのTT授業や進路指導の内容が充実した。また、先進校視察により、商業と体育の学校設定科目に向けた情報収集をし、自校の授業づくりの準備を進めることができた。本事業の生徒の満足度も、3.7ポイントにまで高まった。

3年目の令和2年度は、4、5月の臨時休業が明けて6月から授業再開となり、感染症対策を講じながらの実施であったが、赤ちゃん交流会以外の計画した内容は、予定どおりに実施することができた。本事業の満足度は、前年度と同じ3.7ポイントと高い評価を維持することができた。

3年間取り組んだことにより、生徒は地域の良さを知り、現在と将来の地域での役割を考えながら、高校時代を過ごすことができた。進路を考える際にも、具体的に考えるきっかけとなり、将来、地域を支える人材となるための意識が高まったといえる。

3 今後の取組

燕市は、産業や観光資源の多い地域である。また、「吉田高校サポート協議会」の協力により、講師派遣や体験学習に取り組みやすい体制ができている。令和3年度入学生から80人募集となったが、これまでの地域との連携により、体験的な学習やボランティア活動を継続させ、生徒の成長を支援するとともに、本校の魅力を発信していきたい。

(様式1)

塩商工第198号

令和3年3月15日

高等学校教育課長 様

学番57 県立塩沢商工高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

塩沢商工高等学校	
【テーマ】	地域と連携した教育課程編成の研究
【目標】	地域のニーズを見据えた特色ある教育活動(教育課程)により、地域企業が求める人材育成を推進し、地域に根ざした人材の育成を図る。このため、地域と連携した教育課程編成の研究に取り組む
【取組の概要】	(1) 生徒の土木に関する仕事への理解を深めるための効果的な導入方法の研究 (2) 克雪・利雪の事例等による地域理解を深めるための研究 (3) 地中熱を利用した技術を指導するための研究活動 (4) コミュニケーション能力の向上を図る指導方法の研究 (5) 生徒に地域の課題と解決策を考察させるための効果的な指導方法の研究 (6) 地域と連携した教育活動充実のための研究 (7) インターンシップ実施(2年生全員)
【取組の成果】	(1) 将来、地域産業を支え、活躍する人材を育成するための教育課程編成に繋げる事ができた。特に機械システム科から地域創造工学科への学科改編には、教育課程の内容も含めて、大きな役割を果たす事ができた。 (2) 地元建設業協会と連携した取組を取り入れた教育課程の編成と、地中熱を利用した技術等に関する指導方法の研究を行うことで土木に関する仕事への生徒の意欲・関心を高め、建設業への就職者数の増加に繋がった。 (3) 観光教育に関する内容を取り入れた教育課程編成を研究し、生徒の観光ビジネスへの興味・関心を高める事ができた。また、郷土の良さを再確認し、郷土愛を醸成する育成に繋がった。さらに、ビジネスマナーと英会話の必要性の再確認をし、継続的な取組の必要性を感じている。 (4) 上記教育活動の情報を地域へ発信することで、地域から信頼され、期待に応える魅力ある学校づくりに繋がった。特に、中学校の教員及び生徒へ専門校の魅力と本校の特色ある取組を積極的にアピールする事ができ、昨年の入試では、商業科の受検希望者が22.5ポイントの増加、今年では地域創造工学科の受検希望者が23.8ポイントの増加に繋がった。

【魅力と活力】実施報告_10_(塩沢商工高校)

1 生徒の土木に関する仕事への理解を深めるための効果的な導入方法の研究について

令和2年8月に地域創造工学科1年生を対象に土木作業現場や作業に使用する建設機械を実際に見学・体感することで土木の重要性について理解を深めるとともに、2年次のコース選択のための動機付けとし、土木に関する有為な人材を地元へ輩出するための一助とすることを目的として、土木見学を行った。

【生徒の主な感想】

- ・ICT技術を使って作業の効率を上げたりしていて驚いた。土木に興味があったので今回は良い経験になった。
- ・ダムを初めて見たことも驚きましたが、大きさや高さにも驚きました。土木構造物に興味をもつことが出来ました。

【成果と課題】

生徒は実際の土木作業現場を見学・体感できたことで、建設に関する仕事の重要性を理解し、関心を高めることができた。今年度は、地域理解を目的に地域建設現場と建設構造物の見学を行った。

土木を希望する生徒も年々増加傾向にあり、地域理解や地元建設業の役割に関する理解を高める活動を続けていく必要があると感じている。



図1 上沼道バイパス工事(南魚沼市)



図2 三国川ダム(南魚沼市)

2 克雪・利雪の事例等による地域理解を深めるための研究

機械システム科2学年では、克雪・利雪に関する講話を南魚沼市から実施していただいた。講話では地域特有「雪室」についての基礎知識や促進状況を学んだ。また、「貯雪」を利用した冷房など持続可能エネルギーとなることなどを学んだ。

【生徒の主な感想】

- ・自分たちが住んでいる地域に多くの雪室があって驚いた。環境のためにもっと多くの雪室施設が増えれば良いと思った。
- ・雪に色々な利用方法があることを知ることが出来た。その中でも、クーラーとして使えることは意外だった。この地域の夏はとても暑いので雪を使ったクーラーが広がればうれしいです。
- ・雪がエネルギーになるという発想がとても印象的でした。南魚沼市では雪が毎年必ず降るので、この技術がもっと進歩し、次世代のエネルギーになれば良いと思います。

【成果と課題】

3年間をとおして、雪の利用について基礎的な知識を養えたと実感できた。しかし、座学や実習等に雪を取り扱うものが無いため教育課程を含め授業への導入方法を考慮することが今後の課題である。



図3 講義風景



図4 講義風景

3 地中熱を利用した技術を指導するための研究活動

機械システム科3年生を対象とし校地内で地中熱を利用したヒートパイプによる融雪システムの施工を昨年度より継続し行った。昨年度の深さ約3.8mの穴から引き続き先孔し、今年度は4.9mまで先孔した。今年度は災害級の降雪だったため、融雪状況の確認は困難であった。地表と地中では下表のような温度の違いが見られた。温度差の大きな日では20.8の差があるため、融雪効果の期待が示唆される。

表1 地表・地中温度差

月日	気温 []	地表面 温度 []	地中 温度 []	温度差 []
1月8日	-2.1	-7.5	13.3	20.8
1月12日	1.1	3.4	13.5	10.1
1月13日	3.1	10.9	12.9	2.9



図5 先孔延長工事



図6 パイプ埋設

【生徒の感想】

- ・ハンドオーガは予想以上に大変だった。地表と地中の温度に大きな違いがあったことには驚いた。
- ・半永久的に使えるエネルギーなのでもっと広く普及できればいいと思います。

【成果と課題】

昨年度より1.1m深く先孔することができた。また温度差も最大で20.8あり、融雪に期待できる。融雪用パイプの長さや降雪量により融雪は確認できなかったため、次年度以降の課題とする。

4 情報発信に関する企業講話

商業科では、12月に「情報発信に関する企業講話」と題して、共立メンテナンス株式会社様より、商業科3年生を対象に講話をしていただいた。

【生徒の感想】

- ・360°の3Dスコープは自分がその場にいるように感じられて便利だと思った。
- ・情報を相手にうまく届けなければ、発信したことにならない。

【成果と課題】

- ・情報発信の新しい方法として、SNSを利用した情報発信、3Dスコープによるリアルな体験を利用し、コロナ禍でも情報を伝える機会を与えることができた。
- ・競争他社との差別化をどのようにして顧客に伝えるかの話をしていただいた。どんなに素晴らしい考えを持っていても、どんなにいいことを思っている、相手や社会にそれが伝わらなければ、意味がないと感じ取ることができたのではないかと。



図7 3Dスコープ制作



図8 講義風景



図9 体育館での講演

【魅力と活力】実施報告_10_ (塩沢商工高校)

5 情報発信に関する企業講話

12月3日に、株式会社共立メンテナンスに依頼し、「地域の観光資源」に関する企業講話を、商業科1年生から3年生の全員を対象として実施した。地元企業や住民、地域行事への参加の大切さの話であった。



図10 体育館での講演

【生徒の感想】

- ・地元湯沢にこんなホテルがあるなんて、知らなかった。
- ・泊まってみたい。

【成果と課題】

生徒は、普段何気なく接しているものが地元の「売り」であることを再認識し、それをどのようにPRするかが大切である事を学んだ。また、地域の豊さに気づいたようである。

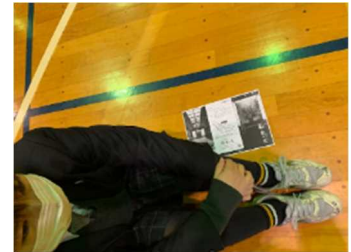


図11 密を避けて

6 地元大学と連携したコミュニケーション演習

12月10日(木) 講師に新潟国際情報大学 国際学部国際文化学科講師 佐藤 泰子氏より、「インバウンドの仕事とは」と題して時折、英語も交えて講演していただいた。外国からの旅行者をサポートする様々な職業の話や業務内容、心得などを生徒が興味を持つような映像を取り入れながらの講演であった。

【生徒の感想】

- ・海外から旅行で日本に来ることで、ビジネスが形成されることを始めて知った。
- ・世界でどれだけ英語が使われているかわかりました。予想外の事を聞かれても、お客さんの気持ちを考えそれ以上の期待に応えるというプロフェッショナルな仕事すごいと思いました。
- ・世界では、多くの人が英語を話すので、私も少しでも理解したり話しをできたりしたらいいなと思いました。お客様に喜んでもらえるように、表情や言葉から本当に読み取っていてすごいなと思いました。
- ・お客の要望にすぐ応えること。表情や変化に気づき行動することはすごく大切だと思った。

7 インターンシップ実施(2年生全員)

令和2年11月11日~13日の3日間で実施した。対象は2学年70名であり、地元企業を中心とした30事業所で職業観、勤労観の育成を目的として実施した。

例年、10月中旬に実施していたが、学校行事等の関係で11月の実施であった。日程と、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、受け入れ先企業数が少なく、希望する職種の体験ができなかった生徒が数名出てしまった。実習直前に受け入れ中止となった企業もあり、生徒を割り当てる作業が難航した。しかし、第2、第3希望の職種であっても、実習の機会を大切に感じながら前向きに実習に臨んでいた。先が見えない状況であったが、多くの企業に受け入れていただき、無事に実習を終えることができた。



図12 塩沢信金



図13 生活センター

【成果と課題】

実習先はできる限り希望に合うようにしているが、希望が実現しなかった生徒も前向きに実習に参加し、職種ごとの特性や楽しさを感じたり、自己の適性を見出したりしていた。

実習をとおして社会人の生活に触れ、学習に対する姿勢が向上し、挨拶や言葉遣いが改善した。

進路を考えるにあたり、本当に就職希望でよいのか、自分は進学して何を学習したいのかなど、進路選択に対して深く考えるようになった。それによって、インターンシップ後の進路ガイダンスでは、数名の生徒が参加職種を変更した。

事前指導の時点では、説明を真剣に聞けなかったり、実習に必要な書類の準備が遅かったりとインターンシップに対する意識が下がった。

また、実習直前になって体調不良となり実習を中止せざるを得ない事態も生じた。体験先が保育関連施設であったため、給食の準備等をすでに予定しており、体験先に迷惑をかけることもあった。

事後指導における礼状指導について、統一した指導を整備する必要があった。

実習初日の挨拶がよくないことや、声が小さいことなどは今年も指摘いただいた。2日目以降は慣れもあり、かなり改善するようなので、事前指導での意識付けが重要であると感じた。

【まとめ】

企業としては、このインターンシップ事業が3年時の進路選択と結びつき、「体験先＝受験先」という形が理想であるというお話を伺った。そのため、一部の企業では簡単な作業や、体力的、精神的につらい作業を避ける傾向があるようである。しかし、学校としては、働くことの大変さをとおして、働く意義や社会人としての覚悟、地域社会と保護者への感謝などを学ばせたいと考える。

インターンシップをはじめとする各種就業体験の意義は、進路との結びつき以前に、職業観や勤労観の育成であると考え、企業と学校双方の希望を両立することは難しいが、地域に根ざした生徒の育成と地域貢献のため、相談、連携をして意義ある事業にしていきたい。

8 自己評価（数値目標）

平成30年度の自己評価の【生徒アンケート】では、「事業を通して地元企業に対する理解が深まったか」の質問では、「思う」と答えた生徒が72.4%であり、「就業体験をとおして勤労観が醸成されたか」では、「思う」と答えた生徒は77.3%であり、両方の質問とも目標の70%以上を達成した。

令和元年度の自己評価については、新型コロナウイルス拡大による登校禁止により、生徒へのアンケートが実施できなかった。

令和2年度は、「地域のニーズを見据えた特色ある教育活動（教育課程）であるか。」の質



図 14 小島電設



図 15 寿司道楽



図 16 紛研パテックス



図 17 種村建設

問に、生徒・保護者からアンケート実施し、「思う」と答えた生徒が83%、保護者が88%であり、両方、数値目標の70%以上を達成することができた。また、教科別では、商業科は「思う」が86%、地域創造工学科は「思う」が80%であり、両学科とも80%を超える数値を得ることができ、この事業の活動は有意義であったと評価できる。また、特に来年度2年生となる学年は、地域創造工学科の約半数が土木系コース(環境デザインコース)を希望しており、この事業の効果が大きかったと言える。

9 総合所見

本校は、南魚沼地域を支える人材の育成が期待され、機械システム科においては、令和2年度入学生から地域創造工学科に学科改編され、2年時に、土木系の地域デザインコース、機械系の機械システムコースに分かれることにより、授業内容をより明確にし、各コースとも今まで以上に授業内容の充実化を図っている。実習では、地元企業の方々に授業支援協力や講演をいただき、その際、実際の現場の考え方や雰囲気を生徒に伝えてもらった。講義や実習で学んだ課題解決方法を実際に活用する場面を設定し、対話的で深い学びを生徒に取り組みさせることで、より効果的な指導へと繋げることができた。また、商業科の生徒においては、令和4年度からの新カリキュラムで始まる科目「観光ビジネス」へ向けた内容の下地ができたこと、そして、協力いただいた地元地域の方々との繋がりを持つことができたことは大きな収穫であった。今後も、観光地南魚沼の発展に少しでも力になればと願っている。地域と連携した取組により、社会に開かれた学校・地域から期待される学校になったと考える。課題としては、参加することが主となってしまい、参加する地域行事が集中したことがあり、生徒への負担が大きくなることがあった。今後は、負担も考慮した参加計画を立てることが必要である。

インターンシップにおいては、コロナ禍にも関わらず、多くの企業が生徒の実習を快く受け入れていただき、地域の本校への期待も強く感じられ、大変感謝している。

最終年度の令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、外部の活動が制限され、計画通りの活動ができなかった。しかし、この3年間の活動はこれからの本校教育活動にとって貴重な礎になり、両学科とも新しいカリキュラムへの道筋を固めることができた。今後は、新しいカリキュラムへ向けて、今まで以上に地域と連携した人材育成が必要である。こうした取組ができたのも、県教育委員会、地域の企業・団体様のご協力と、本校生徒の育成のためにご尽力いただいた皆様方のおかげと、深く感謝する。



図 18 成果発表会

(様式1)

十高第361号

令和3年3月16日

高等学校教育課長 様

学番 58 十日町高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

十日町高等学校

【テーマ】 大学進学実績の向上と地域から信頼される学校づくりの推進

【目標】

- 進学に対する意識の向上、目標大学に合格するために必要な学力を養うため、進路講演会を開催し、進路実現への手助けをすると共に夏季の学習合宿等で、学力の向上、受験勉強の定着を図る。これらの取組を学校全体に波及させ、進学実績の向上を図る。
- 本校の教育活動や生徒会、部活動などの活動を発信するとともに、主体的、探究的な学びの成果を発表し、地域の学校としての位置づけを明確に示す。地域の中학생から選ばれる学校づくりを進める。

【取組の概要】

- 大学進学実績を向上させるための取組
 - ・生徒と保護者を対象とした外部講師による講演会を実施し、進路選択の支援を行った。
- 生徒の主体的な学びの成果等を発信するための取組
 - ・「まちなか×GAKUENSAI」への参加をとおして、生徒の学習成果や、生徒会、部活動の活動を地域に発信した。
 - ・公式 Twitter や学校紹介ポスターを通じ、学校の活動を地域に発信した。
 - ・夏季休業中に予定した学習合宿、サイエンスフェスティバル、学習成果発表会については臨時休業回復のため夏季休業日での設定ができないこと、また対面接触による感染症拡大リスクの点から実施を見送った。

【取組の成果】

- 生徒と保護者に向けた講演会を開催し、進学意識の向上、家庭と連携した進路指導ができた。また、最新の進路情報などを示し、具体的な進路選択の意識づけを行うことができた。
- 生徒の諸活動を地域に公開することで、本校の特色や魅力を示すことができ、令和3年度の一般選抜倍率が1.10倍(志願変更前は1.17倍)となるなど本校を目指す中学生の増加につなげることができた。
- 進学実績向上では国公立大学の合格者数が平成30年度以降増加を続け、本年度は26名となった(後期を除く)。これは過去8年で最も多い値であり、地道ながら着実に合格者数が増えている状況である。

1 今年度の取組

(1) 大学進学実績向上に向けた取組

親子で考える「大学進学実現にむけて」講演会

目的 1、2年生の大学進学希望者と保護者が、大学受験に必要な知識、準備の進め方、学習方法や心構え、保護者の役割等についての講話を一緒に聴くことで、共通理解の下で受験生としての準備をスタートするきっかけとする。

日時 令和3年2月13日(土)

場所 越後妻有文化ホール「段十ろう」

対象 1、2年生大学進学希望生徒とその保護者

参加者 生徒31人 保護者46人 教員5人 合計82人

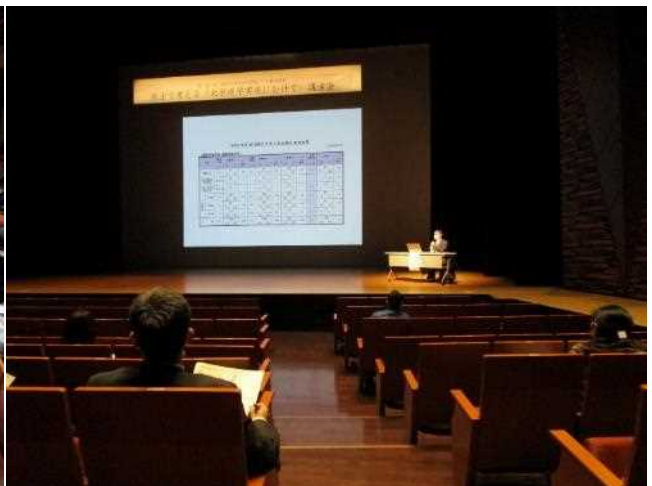
内容

第1部 講師 大山 正義氏 (さんぼう専属講師)

演題 「大学進学実現に向けた準備と保護者の役割」

第2部 講師 阿部 一郎氏 (新潟県立大学 業務推進部)

演題 「新潟県立大学のご紹介」



(2) 生徒の主体的な学びの成果を発信するための取組

「まちなか×GAKUENSAI2020」への参加

概要 十日町市の「まちなか」の施設と高校生たちが協力して開催する GAKUENSAI。6つの会場が、それぞれのアイディアで様々な企画を同時展開する。

本校からは生徒会執行部、吹奏楽部、書道部、美術部、写真部がステージの進行や演奏、各ブース展示をしたほか、有志ダンスチーム(2組)が参加し、さらに運営ボランティア、歌うま選手権出場など合計で80人以上が参加した。本校のほかに、十日町総合高校、松代高校、津南中等教育学校、川西高等特別支援学校が参加した。

コロナ禍で文化系部活動の発表機会が減っている状況下で貴重な発表の機会となった。

【魅力と活力】実施報告_11_(十日町高校)

日 時 令和2年11月8日(日)

場 所 十日町市内6施設(アップルとおかまち、いこて、わかふえ、段十ろう、十じろう、分じろう)



(3) 地域に向け、学校の取組等についての情報を発信するための取組

学校紹介ポスター「十日町高校 NEWS」の発行

概 要 平成30年度から本校の学校行事、部活動、グランドデザイン、アドバンスクラスについてなどの情報や写真を用いB2サイズカラー印刷のポスターを作製し、近隣の中学校(30校程度)や在校生の出身校へ配付、掲示を依頼してきた。本年度は通算第7号のみの作成となったが「コロナ禍に負けない!令和2年度の十日町高校の学校生活を紹介します/学校生活アンケート」という題材で学校紹介ポスターを作成した。

Twitterを活用した情報提供

概 要 平成30年7月から試験運用を開始。8月から本格運用を開始した。学校行事等の様子や部活動の結果、日常の学校生活の風景等を発信。令和3年3月時点でフォロワーは400を超えている。



2 取組の成果

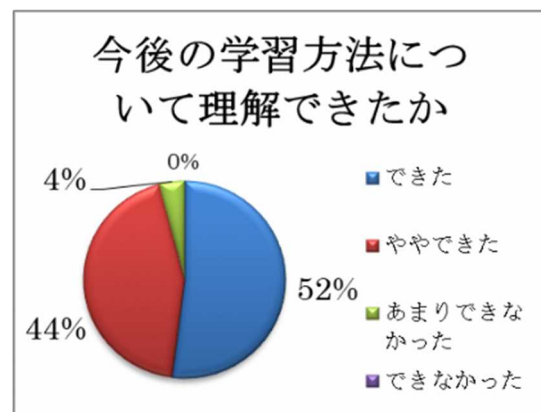
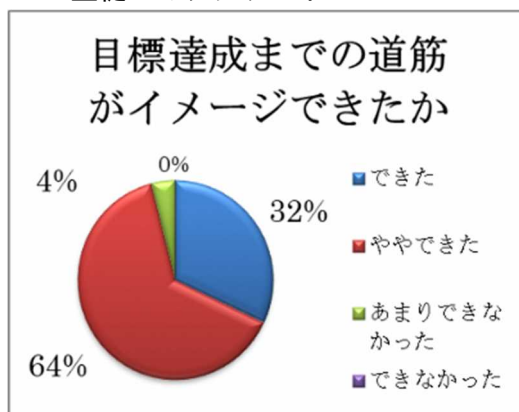
(1) 進路講演会アンケートの結果から

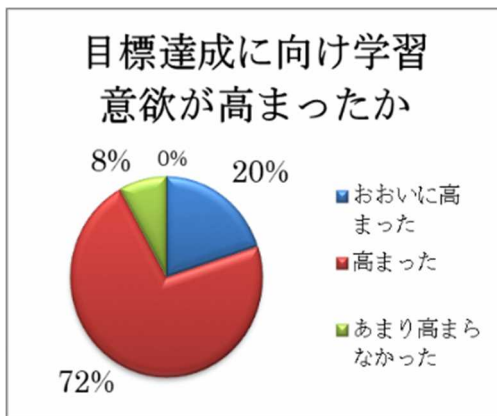
進路講演会の生徒及び保護者アンケートの結果は以下のようになった。

目標達成までの道筋がイメージできたかについては「ややできた」が一番多く、続いて「できた」が2番目に多かった。今後の学習方法について理解できたかについては「できた」が一番多く、続いて「ややできた」となった。上記の二つの観点については「できた」「ややできた」が9割以上を占めており、講演会の効果があったといえる。

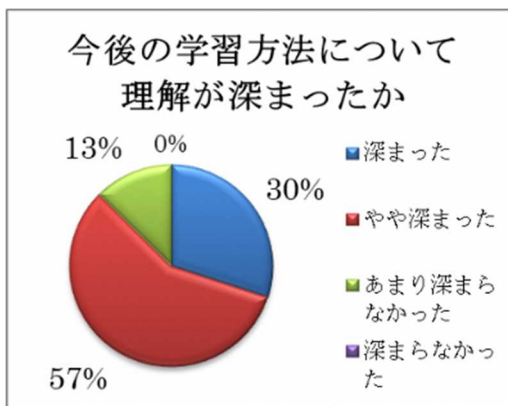
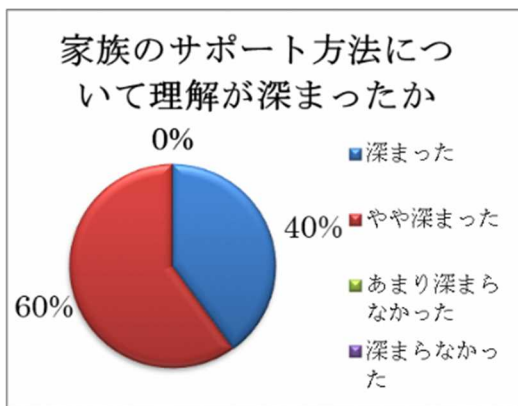
また、目標達成に向け学習意欲が高まったかについても「おおいに高まった」「高まった」が9割を超えた。

生徒へのアンケート

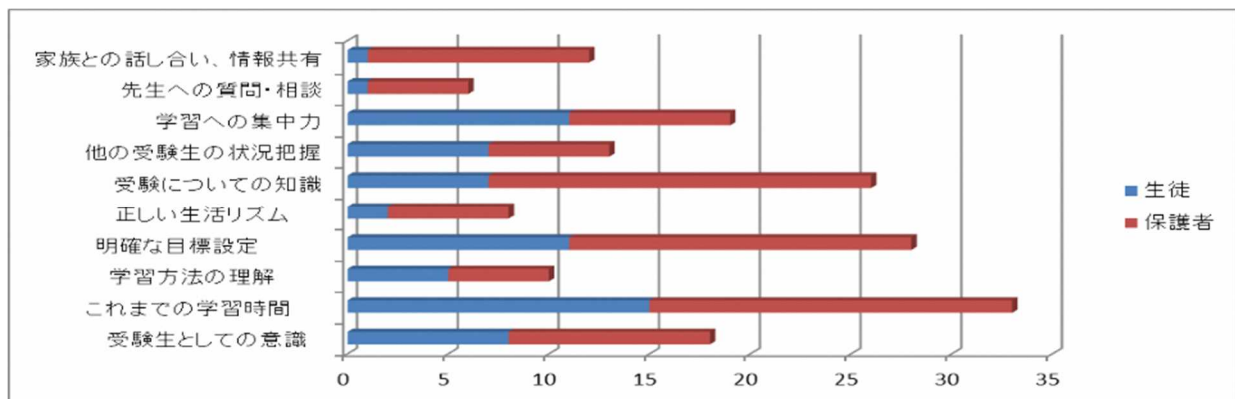




保護者へのアンケート



これまでの学習の様子を振り返り、足りなかったと感じる点



講演会 (生徒の感想)

- 新しい入試では思考力が大切だとは知っていたけれど、それだけではなく社会問題を知って、その問題に自分がどう変わっていくかを考えたり、何のために大学に行って何を学びたいか考えたりすることが大切だとわかり、今からしっかり考えていきたいと思った。
- 今までの自分を振り返って、首都圏の受験生との違いを思い知らされたので、今後は生活を見直し、集中して学習したいと思いました。
- 大学進学で大切なことは、将来自分が何になりたいかということを考えて選択することだと知った。そのためには、今から大学入学に向けてどう自分はすべきなのか逆算して行動すべきと感じた。

講演会（保護者の感想）

- 社会問題や時事問題等に目を向けて探究する。何のために大学に行きたいか、ということ一度子供と話をしてみたいと思いました。
- 入試制度を安易に考えていたところがあったので、講演の中でポイントとして印象に残りました。今から目標に向けて学習することの大切さを改めて考えさせられました。

(2) 進学実績と地域から信頼される学校について

卒業生数・国公立大学合格者数・大学等進学率の推移

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度
卒業生数	272 人	254 人	272 人	232 人
国公立大学合格数	19	22	25	26
大学等進学率	50.0%	48.8%	46.7%	49.6%

国公立大学等への進学を希望する生徒で編成した「アドバンスクラス」の第1回生が卒業した平成30年度以降、国公立大学の合格者数は増加傾向にある。学習環境の整備と本事業のような進学実績の向上に向けた取組がうまく機能した結果と考えてよいのではないかと。一方で大学等進学率は減少傾向があり、学校全体の進学実績の底上げが必要である。

最近4年間の一般選抜の志願倍率を見るとH30年度1.04倍、令和元年度1.03倍、令和2年度1.03倍、令和3年度1.10倍と1.0倍を維持している。また特色化選抜でも令和2年度で募集人数10名に対し19名の出願、令和3年度は15名の出願があった。これらの数値から部活動においても選ばれる学校として定着してきたと考えている。

3 総合所見

大学進学実績を向上に向けた取組、地域に向け学校の取組を発信する取組ともに現時点では良い成果が表れていると感じている。一方で大幅な実績向上ができるような特効薬的なものではないことが分かった。今後も地道にこれらの取組を続け、進学実績の数値や志願倍率などを見ながら方向性や方法について修正していく必要がある。

4 今後の取組

進学実績の向上と地域から信頼される学校づくりは今後も本校のテーマであることに変わりない。本年度実施できなかった夏季の学習合宿や、大学などと連携した進路指導や講演会、模擬授業などにより、生徒の進学意識を高め、受験体制を充実することが必要と考える。

地域から信頼され、多くの中学生が目指す学校づくりでは、今後も活動の発信を続けていく必要がある。中学校や小学校とも連携し、本年度開催ができなかったサイエンスフェスティバルや学習成果発表会の開催、オープンスクールを通じた情報発信、「まちなか×GAKUENSAI」への継続した参加など地域の学校であることを示し、勉強と部活動の両立や部活動の成果を、生徒会と連携しながら発信する取組を続けていく。

高等学校教育課長 様

学番72 久比岐高等学校長 平原 孝之

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

久比岐高校
【テーマ】 生徒協働による「主体的・対話的で深い学び」を実現する学校をめざして
【目標】 1 学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実 基礎・基本の定着、言語力の養成、進路実現および社会人になるための準備等を行うが、その内容について教育課程委員会で常時議論し、改善を図る。 2 「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善 大学等と連携し『学び合い』を含む協働学習による「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善を図る。 3 ICT教育の充実 教職員が電子黒板を使用しやすい環境にする。
【取組の概要】 「ステップアップ」の実践をとおして、久比岐高校に適した「学び直し」、「言語力の養成」、「進路実現のための取り組み」を研究した。 「主体的・対話的で深い学び」に向けた指導改善のため、大学等と連携して、すべての教科で『学び合い』を含む協働学習の授業を実践しようと計画し、実践した。 当校における協働学習の最適化のために研究会に参加した。また、電子黒板等ICT機器活用先進校を視察し当校に適した協働学習、電子黒板を使った授業を研究した。 校内授業公開週間の設定を定着させ、全職員が授業を見学し授業改善に生かした。 全教科で『学び合い』を含む協働学習による公開授業をおこない、国語、公民、数学、理科の4教科について研究授業を公開した。 電子黒板のプロジェクターを天井につり下げ、教員の体が投影を遮らない環境を作ると同時に、周辺機器の整備も行い教員にとってのICT機器への抵抗感を減らした。
【取組の成果】 「ステップアップ」は、昨年、教育課程委員会で議論した内容を1年間実践し、生徒の意欲を引き出す、久比岐高校に適したカリキュラムを研究することができた。 『学び合い』を含む協働学習の授業や電子黒板と協働学習を組み合わせた授業での生徒の理解が増し生徒の満足度が高かった。主体的・対話的で深い学びに繋がっている。 電子黒板が簡単に使用できるようになったこともあり、電子黒板の使用を前提とした授業計画をたてる教員が増えた。様々な機器を組み合わせる授業を行う教員も現れた。 授業公開は容易に「クラスを見に行く」ことができ、生徒観察をすることもできた。他教員と生徒のコミュニケーションを見学することも授業改善に繋がった。 授業の目的や成果の意義が生徒にはわかりづらかったことなど、研究協議会で得たことは教員で共有し、授業改善につながる助言や指導をいただいた。 電子黒板教室の稼働率が上がり、生徒の学びについても成果が上がった。

【取組の内容】

1 学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実

(1) 学校設定科目「ステップアップ1」による、学び直しの取組

「ステップアップ1」は3年間、継続して「学び直し」に重点を置いている。全2単位のうち1単位は英語を通常クラスでおこない、残る1単位は通常クラスを2展開して義務教育段階の内容も含む基礎的な計算、漢字、語彙などの復習にあてた。

(2) 学校設定科目「ステップアップ2」による、論理言語力を養成する取組

「ステップアップ2」は2年目となり改善や工夫を加えた。全2単位のうち、言語内容1単位を通常クラスでおこない、残る1単位は通常クラスを2展開して論理言語力検定3級程度の問題集に取り組み論理力、言語力の養成に励んだ。

生徒全員に、実際に論理言語力検定を受検させ、多くの生徒が3級以上に合格した。合格し、自信を付けた生徒の表情が印象的であった。

(3) 昨年度議論した「ステップアップ3」の内容の実践

今年度から行った「ステップアップ3」は進路実現に向けたより実践的な内容として、上級学校への進学希望者に対しては発展的な教科学習、就職希望者に対しては教科横断的な学習を計画した。特に就職希望者には一般教養や作文といった就職試験対策となる。進路決定後は新社会人に向けた学習として、合格体験記の作成と生徒相互の添削、合格体験発表会、タッチタイピングの練習など実践的な学びを通じて表現力や発表の技能を磨いた。

2 「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善

(1) 授業改善のための上越教育大学との連携

昨年度同様、本年度も校内に「学び合い推進委員会」（校長、教頭、教諭5名）を設置した。この委員を中心として組織的に授業改善を推進した。しかし、新型コロナウイルス感染防止のため、『学び合い』を始めとした協働学習は難しくなり中断を余儀なくされた。

2年生の数学において、断続的に『学び合い』による授業を実施したが、2学期後半から学習内容に論理的な要素が多くなり、丁寧に教員が説明しなければ生徒が理解できない場面が増えてきた。そこで、臨機応変に『学び合い』活動を行うこととした。1年生の化学基礎においても2学期後半から『学び合い』が行われるようになった。

11月から上越教育大学大学院教授 片桐 史裕 氏に依頼し、当校教員の授業をビデオに収め、研究室で授業改善のための分析をしていただいた。そして、当校教員に授業改善案を示してもらうことにした。

12月9日（水）5限、当校教諭 廣瀬 による現代文Bの授業を、6～7限に当校教諭 松田の人権同和教育「就職差別」の授業をビデオ撮影してもらった。当日に簡単な研究協議会をおこない、後日、授業改善のための詳しい提案をメールでいただいた。今後の授業改善に大いに生かされる具体的な提案であった。

(2) 授業の参観

コロナ禍のため『学び合い』の出前授業を上越教育大の研究室に依頼することが難しい状況だった。また、他校の公開授業の数は少なく、授業参観もしづらい状況であったため、新潟県においてコロナ感染が下火になった3学期に行った。

1月29日（金）当校教諭2名（廣瀬、松田、ともに学び合い推進委員）が新津高校を訪問し、次の4つの授業を見学した。国語科教諭による現代語から古文に直すことを班ごとに行わせる「対話的で深い学び」に向けた授業（古典B）、同教諭による電子黒板を活用した一斉授業（現代文B）、数学科教諭による教科書の発展課題の証明問題を考えさせる「対話的で深い学び」の授業（数学 特進クラス）、理科教諭によるフラッシュ

【魅力と活力】実施報告_12_(久比岐高校)

メモリーを使った電子黒板の授業(化学)である。また、別の理科教諭からは休憩時間中に iPad を使った電子黒板の使い方を指南していただいた。

(3) 校外研究会の参加

10月24日(土)第12回越後『学び合い』の会にリモートで参加した。当校の参加者は校長、教諭1名の合計2名である。

全体会では福島県の小学校高橋 尚幸 教諭の講演「つながる学びが、広がりを生む。」を視聴した。高橋教諭は著書「流動型『学び合い』の授業づくり」で時間割や学習内容など、1日の学びのデザインを丸ごと子どもたちに任せてしまう「流動型『学び合い』」を提唱しており、今回の講演もそれらの実践により生みだされる生き生きとしたこどもの姿と卒業時の感動の別れ、卒業後の生徒との強い結びつきなどを語っていた。また、『学び合い』授業特有の保護者との軋轢とその解決法などを質問形式で語った。生徒の自由度の高さが「主体的・対話的な深い学び」を実現する鍵であることを再認識した。

分科会では中本 翔太 教諭(高校)から、生徒は授業における課題が終わったら、他の科目や進学、就職試験の対策などなんでも行うことを許す、個別最適化の『学び合い』授業の実践について考えさせられた。

全体会、分科会のいずれも『学び合い』授業の発展型であり、『学び合い』授業をこなすことができた生徒にとっての次の段階を示したもので、興味深い話題であった。

(4) 校内授業公開週間の設定

昨年と同様に10月26日(月)から11月6日(金)までを、授業改善のための授業公開週間とした。また、各教員にとっては自分の授業以外のときは、クラス(生徒)はどんな様子かという、別の顔を見ることができるという点で、授業見学は大きな意味を持つものであるという意見をいただいた。

実際、他教員と生徒の距離感やコミュニケーションは生徒理解を深め、同時に教員それぞれの生徒とのコミュニケーションの参考になった。

(5) 「学び合い推進委員会NEWS」の発行

コロナ禍により、他校の公開授業の数は少なく、授業参観もしづらい状況になったことから、協働学習の研修会の案内や、見学、視察をレポートする「学び合い推進委員会NEWS」の発行回数が減った。昨年度は5回発行したが、今年度は10月24日(土)の越後『学び合い』の会のリモート開催に関する1回にとどまった。

(6) 学び合い推進委員による公開授業

当初、1月14日(木)に開催する計画を立てたが大雪のために開催することができず、学年末試験終了後の2月22日(月)に延期して研究授業の公開と研究協議会を実施した。

5、6限に学び合い推進委員の3名とNIE教育推進委員1名の合計4名が研究授業を公開した。

7限以降の時間帯に研究協議会を行った。校外から16名、校内から8名の参加があった。公開研究授業実施科目、単元(タイトル)、担当者、内容は次のとおりである。



【魅力と活力】実施報告_12_(久比岐高校)

1 学年	酸化と還元	杉山 教諭
化学基礎	テスト返却・答え合わせ(10分) 酸化還元の定義の説明(20分) 問題演習(15分) 小テスト(3分) まとめ・評価(3分)	
1 学年	「現代社会の諸課題」	井上 教諭
政治・経済	授業内容・目的確認(5分)スクラップ記事の情報、気づき、感想等を各自まとめ(20分) グループごとに関心の高い課題を共有、解決に向けた方策や取り組みについて考察、まとめ、代表が発表(20分) 授業のまとめ。「コロナ禍」の意味を考える。(5分)	
2 学年	「条件付きの等式の証明」	松田 教諭
数 学	証明のしかたを説明(5分) 問題演習(10分) 比例式の条件付き等式の証明を説明(10分) 問題演習(10分) 生徒の答案を投影し答案作成注意(5分) 小テストとまとめ(5分)	
2 学年	短歌「ただ一枚の絵葉書」	廣瀬 教諭
現代文 B	本時内容確認、グループでくじ1本引き歌を決める(5分) (班学習)1つの歌についてストーリーを作る。適宜辞書引き(40分) 進捗状況の確認、まとめ、次回予告(5分)	

(7) 電子黒板の教室固定化

昨年度は教職員が教室に行き、電子黒板を使った授業をすぐ始められるよう、2台ある電子黒板を2教室それぞれに台上に固定した。今年度は、毎時間、電子黒板を使用する教職員も出てきたことから、より使用効率をあげるため、教室でプロジェクターの吊り下げ工事を行った。

これにより、教員の体が投影を遮ることもなく、電子ペンの反応も良く、さらに効果的に利用することが可能となった。



【取組の成果】

1 学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実

1学年「ステップアップ1」の「学び直し」は、生徒アンケートの結果「授業内容が理解できた」が91%、「力がついた」が91%となり、生徒の意欲など感覚的な面で大きな成果があった。実際、1学年の欠点数が減少するなど数値面でも成果を上げていることから継続していきたい。

2学年「ステップアップ2」の「論理言語力学習」は、生徒アンケートの結果「授業内容が理解できた」が82%、「力がついた」が90%となり、生徒は概ね満足していると思われる。論理言語力検定は2学年43人全員が受検し、3級合格は24人、準3級合格は5人となり、準3級以上の合格者は67.4%であった。授業内容については生徒の評価が高いため、今後、多くの生徒が学習成果を感じるように、検定試験の合格率を上げるための方法を議論する必要がある。

3学年「ステップアップ3」の進路実現講座は、生徒にとってより実践的で様々な体験ができ、満足できる内容だったと思われる。しかし、教員にとっては毎回、担当するクラスや教える内容が変わり、煩雑さが否めないものとなっている。今後、教員の減少に伴い、内容を精選し成果を損なわずに煩雑さを改善する方策を求めていく。

2 「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善

< 成果 >

- ・1年生の化学基礎における研究授業は、生徒アンケートの結果「授業が理解できた」が94%、「力がついた」が94%となっており、生徒の満足度は高い。研究授業で実践した『学び合い』が主体的・対話的で深い学びにつながっていると考えられる。
- ・上越教育大学大学院 片桐 教授と連携し、授業をビデオで撮影してもらい、授業改善案をいくつかいただいた。どれも非常に的を射た発想豊かなものであった。これらの意見を取り入れ、次の授業に役立てることができた。
- ・『学び合い』授業の研究会にリモートで参加し、授業を実践する上での疑問点を直接講師に聞くことによって解決できたり、他の実践者の悩みなどを共有したりすることができた。これからの授業の指針を立てるために大いに役立った。
- ・国語科教員、数学科教員で「電子黒板を使った授業」を見学し、電子黒板の効果的な使い方を学び、授業に役立てることができた。また、『学び合い』授業に効果的に電子黒板を取り入れる方法を考えるきっかけとなった。
- ・授業公開週間を設けることにより、校内で気軽に他の教員と授業についての意見交換ができた。それぞれの授業の質が向上する機会を創出した。
- ・授業公開週間では副産物的に、各教員の担当授業以外での、生徒の様子、学級の様子を観察できることとなり、生徒の指導や声かけに役立った。

< 課題 >

- ・2学年の数学 では、学ぶ内容が難しくなるにしたがい『学び合い』学習がうまくいかなかった。昨年度の改善案のとおり『学び合い』のルールを明確にし、毎時間、『学び合い』の態度を教員が評価することを最初に明言した。クラス単位のティームティーチング（以下TT）スタイルで授業を始めたが、学ぶ内容が難しくなるにしたがい、理解できずにあきらめる生徒が増え、平均点も下がっていった。11月から1学級2展開とし、少人数クラスで講義形式の授業を行ったところ、丁寧に教えてもらえる安心感があったという生徒もあり、平均点は持ち直した。2月の学年末試験後に、再びクラス単位でTTの『学び合い』授業に戻した。今度は、電子黒板で要点を簡単に説明した後、『学び合い』で演習を行った。3月の生徒アンケートの結果は次の表のとおりである。

【魅力と活力】実施報告_12_(久比岐高校)

	よく理解 できた	だいたい理解 できた	あまり理解 できなかった	全く理解 できなかった	未記入
『学び合い』授業	14%	64%	14%	5%	2%
少人数クラスの講義形式授業	41%	52%	2%	0%	5%
電子黒板を使った『学び合い』授業	14%	57%	14%	5%	10%

『学び合い』授業では「理解できない」と答える生徒が一定数いるのに対し、少人数クラスの講義形式授業ではほとんどいない。『学び合い』授業と少人数クラスでの授業のどちらが良いかという問いには『学び合い』授業が良いと答えた生徒は全体の29%、少人数クラスの講義授業が良いと答えた生徒は全体の64%であった。結果として、学ぶ内容が難しくなってきたら、生徒の力を測りながら『学び合い』TTをやめ、少人数クラスの講義授業にした方が生徒の安心感等の意欲面でよい場合があることがはっきりした。しかし、生徒が受け身にならないように、教員は留意しなければならない。

生徒の感想としては、少人数クラスの授業肯定派の意見は「集中できる」「先生にみっちり教えてもらえる」などがあり、『学び合い』授業肯定派の意見は「授業の雰囲気が良い」「頭のいい人に教えてもらえる」などがあった。

電子黒板を使った『学び合い』は「理解できない」と答える生徒が約20%いた。その生徒の感想では、電子黒板が見づらいという記述があったことから、工夫が必要である。

<改善策>

- ・授業規律を保つためには、『学び合い』のルールを明確にし、毎時間『学び合い』の態度を評価することを最初に明言すること、授業の自己評価シートノートを毎日提出させる。
- ・課題の難易度を高くしたい場合は講義を1、2回はさむ必要があると思われる。また、生徒の学習習慣の定着など全体の学力向上だけでなく、難易度の高い問題に取り組める生徒を育てるためにも、週末課題を工夫し提出を求める。
- ・難易度の高い問題は授業では扱わずに進学補習等で扱うのが無難であるという考え方もあるが、生徒が探究的に学習に向かうきっかけを排除することになりかねない。授業では難易度の高い問題を完全には捨てず、折に触れて生徒を刺激し続けることを継続する。

3 ICT教育の充実

プロジェクターを教室の天井から吊り下げる工事をおこなった結果、電子ペンの使い勝手が向上し、電子黒板を使用する教員が増えた。

一昨年度に整備されたアクセスポイントを教室に固定することで、タブレット型パソコンを教室内に持ち込めばすぐにインターネットに接続できることや、ワイヤレスでタブレット型パソコンと電子黒板を接続できるようにしたこともあり、活用の幅が大きく広がった。さらに、それらを活用する教員も増えた。「手間をかけずに使える」ことは重要であると考える。

【総合所見】

学校設定教科「ステップアップ」について、「ステップアップ1」、「ステップアップ2」は工夫と改善の結果、生徒の評判も良く成果を上げている。1年目を終えた「ステップアップ3」については、今後、改善しながらよりよいものにしていきたい。また、授業規律の維持など『学び合い』の課題を解決するため、改善策を教育課程委員会等で協議し、授業で試行していきたい。

最後に、この3年間の取組で環境整備が授業改善の鍵であるということ強く感じた。現在、電子黒板および周辺機器はかなり整備されたが、見づらいという生徒の意見もある。カーテンを遮光型にしたり机の配置を工夫したりしているが、すべての生徒が学習に集中できるよう、アイデアや方策を教育課程委員会等で研究したい。

(様式1)

羽高第203号

令和3年3月12日

高等学校教育課長 様

学番 79 羽茂高等学校長

魅力と活力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

羽茂高等学校
【テーマ】 「地域と共に未来に羽ばたく」 ～地域と連携した取組の推進に向けて～
【目標】 令和2年度入学生が1年次の「総合的な探究の時間」を中心とし、佐渡の文化や産業などの地域資源を活用した校外活動や地域連携の基礎を学ぶことによる、2年次からのコース制（地域探究コース・文化教養コース）や学校設定教科・科目を活かした学びの構築
【取組の概要】 1年次の「総合的な探究の時間」における、(南)佐渡の「地域に根付き」「地域に貢献し」「地域から発信する」人材を育成するための学びの実現 (1) 2年次からの2つのコースでの教育内容の学びに向けた準備 (2) 地域に密着し、進路希望の実現する教育課程のさらなる検討 そのために、以下の取り組みを行った。 <ul style="list-style-type: none">・ 教育活動、教育課程全体の見直し・ 入学時からの基礎学力の向上と意識啓発・ 1年次における体験的、探究的キャリア教育の研究・ ICTの活用・ ホームページや広報誌による情報発信 以下については、新型コロナウイルス感染症対策のため実施できなかった。 <ul style="list-style-type: none">・ 多様な生徒、特に支援の必要な生徒への対応・ 地域等の外部講師を積極的に招聘する協働的教育活動の推進・ 地域学校間連携（幼・保・こ、小、中、高連携）・ 言語能力の育成
【取組の成果】 (1) 2年次からの2つのコースへのスムーズな接続ができた (2) 高校生活満足度が1年間で8%向上した。 (令和元年度 1年 80.0% 令和2年度 2年 88.0%) (3) 8割の生徒が佐渡の発展を願うだけでなく、自らも関わりたい気持ちがある。 (4) 卒業後の進路決定率が100%となった。

1 取組の内容

(1) 教育活動、教育課程全体の見直し

ア 地域探究コースの設置

令和2年度入学生は2年生から、地域探究コースと文化教養コース(文系・理系)に分かれる。

イ 学校設定教科、科目の設定及びシラバス作成

学校設定教科「地域探究」、学校設定科目「ソーシャルデザイン」「ベーシックコミュニケーション」「グローバルコミュニケーション」「地域探究」を設定し、シラバスを完成させた。



主な学校設定科目

【ソーシャルデザイン】

地域探究のスタート！
地域の諸課題を発見し、その解決案を検討します。

【グローバルコミュニケーション】

地域の魅力を発信！
英語を活用し、国際理解や世界へ情報を発信します。

【地域探究】

地域探究の集大成！
実際に挑戦し、その取組を発表するなど、
地域に還元します。

(2) 入学時からの基礎学力の向上と意識啓発

ア 新入生対象とした意識啓発講演会の実施【講師：鈴木 弘明 氏(新潟総合学院)】

演題「生き方の授業『目の前の事に挑戦し本気で取り組もう!』」

目的 島外より講師を招き、卒業後の自分を想像し、将来を見据えた高校生活を送るための心構えを学ぶ。

5つの質問をしながら、5人のエピソードを紹介した。

- a 何のために勉強しますか？
- b 何に本気を出しますか？
- c 何のために働きますか？
- d 誰に感謝しますか？
- e あなたの使命は何ですか？



(3) 1、3年時における体験的、探究的キャリア教育の研究

ア 1年生対象校外体験活動(総合的な探究の時間)

石名天然杉、尖閣湾揚島遊園、吹上海岸の見学(ジオガイドによる解説付き)をとおして、佐渡島が形成された過程を学んだ。



イ 3年生対象校外体験活動(総合的な学習の時間)

小倉ダム、小倉千枚田、平山の滝の見学をとおして、佐渡の自然環境や世界農業遺産について学び、長谷寺の見学をとおして、佐渡の歴史・文化について学び、自己の命や人生について考えた。



(4) 地域等の外部講師を積極的に招聘する協働的教育活動の推進

ア 1年生対象社会人講演会【講師：春日 絵里奈氏(長蔵)、野口 菜々氏(カヤの実会)】

本校の卒業生で、島外からのUターン経験者の講演をとおして、佐渡の魅力について考え、意見をまとめ発表した。



(5) ICTの活用

ア 県外校視察

福島県立ふたば未来学園中学校高等学校、西会津町立西会津中学校の視察をとおして、ICTの利活用、特に1人1台のタブレット端末を想定した授業経営について研修した。





イ 物品購入

既に配付されたタブレット端末を活かした授業経営に必要な HDMI 変換アダプタ、HDMI ケーブルを購入した。

(6) H P や広報誌による情報発信

ア 新設コースパンフレット作成（添付資料参照）

来年度より本格的にスタートする地域探究コースをアピールするためのパンフレットを作成し、島内の全中学校の他、地域企業や住民に配布する。

2 取組の成果

(1) 教育活動、教育課程全体の見直し

ア 地域探究コースの設置

初年度からの取組の成果が実り、今年度、地域探究コースが設置され、来年度から本格的に動き始める。地域探究コースと文化教養コース（文系・理系）に分かれる。

コース	地域探究	文化教養（文系・理系）	合計
人数（人）	11	11	22

イ 学校設定教科、科目の設定及びシラバス作成

初年度からの取組で、地域探究の先進校の視察やW e b ページの閲覧により学校設定教科の研究を行ってきた結果、4つの学校設定科目の学習内容、シラバスについて、高等学校教育課と協議を重ね完成させた。

(2) 入学時からの基礎学力の向上と意識啓発

「私はなんとなく高校生活終わらせて、なんとなく大人になるのはいやだと思いました。」と生徒の感想にもあるとおり、「目の前の事に挑戦し本気で取り組もう！」という講師の思いが伝わっていた。

(3) 1、3年時における体験的、探究的キャリア教育の研究

「天然杉や尖閣湾で学んだことは、地域の人々によって佐渡の自然として守られているんだなということだった。」とあるように、佐渡の自然と地域との関係を学び取ることができていた。

(4) 地域等の外部講師を積極的に招聘する協働的教育活動の推進

春日氏も野口氏もUターンの貴重な経験があるからこそ、佐渡がどれだけ魅力的なのか語ってくれた。また、一方的な講演ではなく、両氏ともグループワークを取り入れて、「佐渡の良いところだけではなく欲しいものを挙げるという活動がとても印象に残りました。二人とも一度佐渡から離れてここまで活躍しているので広い世界を見ることは大切だと思いました。」とあるように、生徒の考えを上手に引き出してくれた。

(5) ICTの活用

先進校視察では、どうしてもハードウェアの充実に目がいってしまう。しかし、1人1台のタブレットも教室のWi-Fi化も既に完了している中で、意外に忘れられている変換アダプタやケーブルを購入したことにより、複数の教室において電子黒板とタブレットを繋げるようになったことは非常に効果が高い。

また、今年度の視察に関しては、特にアプリや電子黒板の利用方法などを確認し、本校に既存のハードウェアをどのように活用すれば良いのかを学ぶことができた。

(6) HPや広報誌による情報発信

今事業とは別に今年度、本校のHPをリニューアルし、県内外を問わず情報発信を行えるようになった。しかし、地域探究コース設置に絞ったパンフレットを作成することは、本校が最もアピールしたいことを周辺地域に配布という形で行うことができ、デジタルディバイドを意識する必要がない効果的な方法であった。今後も、紙媒体を利用していく。

(7) まとめ

ア 2年時からの2つのコースへのスムーズな接続

(1)のアにあるとおり、地域探究コースは半分の11人が希望している。また、文化教養コースを選択しても、地域探究教科を選択できることから、2つのコースへのスムーズな接続は達成できている。

イ 高校生活満足度を全学年85%以上にする。
右表のとおり、昨年度の1学年の満足度が88.0%となり、成果は上がっている。

年度	1学年	2学年
令和元年度	80.0%	81.5%
令和2年度	65.2%	88.0%

ウ 探究活動をとおして、地域(佐渡)振興に対する興味を80%以上にする。

8月に行った島内高校生意識調査において、本校では下表のような結果が出た。

質問	「大いに思う」「思う」
将来、佐渡が発展してほしいと思う	93.4%
佐渡の発展に役立ちたいと思う	75.0%

また、に対するの割合は80.2%であり、実に8割の生徒が佐渡の発展を願うだけでなく、自らも関わりたいことがわかる。

エ 卒業後の進路決定率を100%とする。

今年も達成できた。

オ 志願倍率の増加。

残念ながら減少した。

3 総合所見

昨年度までのテーマは「『社会に開かれた教育課程』～地域と連携した特色あるコースの設置に向けて～」であった。これは、初年度からの2年間で達成でき、「地域探究コース」が設置された。来年度は、実際に「地域探究」の各科目の履修がスタートする。前述の取組の成果にあるように、今年度の取組で、そのスタートに向けた準備は概ね整ったと考える。特に、各科目の履修内容、シラバスについては高等学校教育課と慎重な協議を重ね、地域のみならず全県の期待を背負えるものになったと考えている。

また、島内高校生意識調査における「将来、佐渡が発展してほしいと思う」「佐渡の発展に役立ちたいと思う」の本校生徒の回答は、島内のいずれの高校・中等教育学校よりも高く、地域と連携した活動や授業をおこなった結果の現れと捉えている。今後、「佐渡の発展に役立ちたいと思う」の割合がさらに高まることを目標としたい。

さらに、テーマ達成に向けてICTなどのハードウェアは十分に整ってきた。そのため、それらを使いこなすための教員の研修や、ICTを利用するための周辺機器の整備(タブレット固定用のスタンド、ヘッドセット等)が必要なことが明らかになった。

今年度は新型コロナウイルス感染症に関連して、当初の計画通りに活動ができなかったことも多かった。しかし、今年度のテーマについては、ほぼ満足のいくものになったと考えており、来年度以降、「地域と共に未来に羽ばたいて」いけるものと感じている。

4 今後の取組

今後は、来年度からスタートする「地域探究」の各科目の評価方法と評価規準について具体的にまとめていく必要がある。実際に授業を進める上で、明らかになったことを評価規準に含めていく。そのためには、評価方法についての職員研修を行う必要があり、年度毎の改善はもちろん、年度内にも必要に応じて計画していきたい。

また、地域と連携した活動や授業については、島内や南佐渡地区はもちろんであるが、学校のある羽茂地区との連携をさらに深めていきたい。今年度の活動が制限されたこともあり、羽茂地区からの連携の希望が多くあると感じている。特に1学年では学校にとってより身近な地域での地域連携を計画していきたい。

